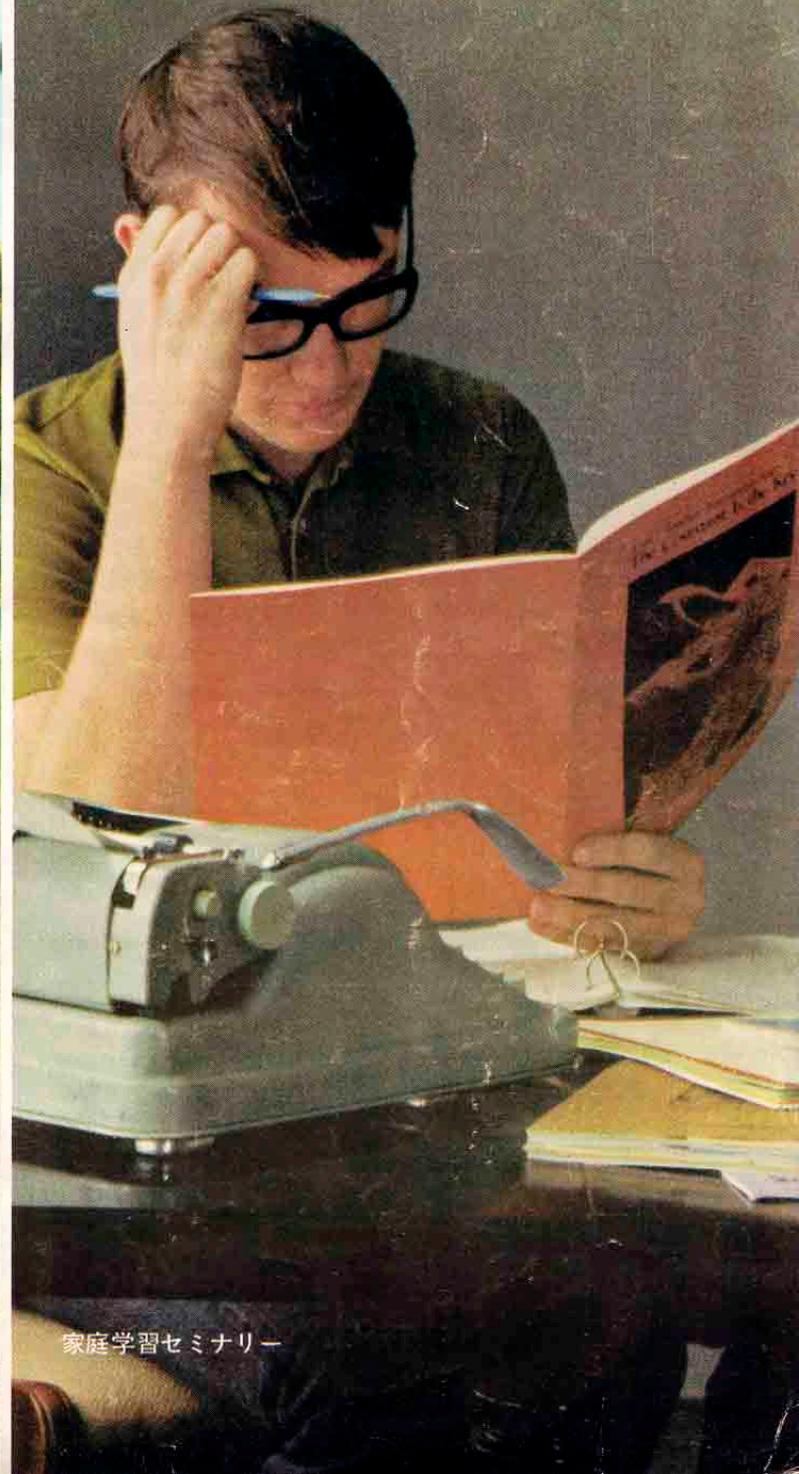




小・中学校

聖徒の道 1971 9



家庭学習セミナー

心の糧

十二使徒会補助

スターリング・W・シル



9月のこよみ

- 1日 1901年 ヒーバー・J・グラント大管長により日本の地にて伝道開始さる。
- 4日 1932年 タバナクル聖歌隊のラジオ放送始まる。(KSL)
- 7日 1958年 デビッド・O・マッケイ大管長により、ロンドン神殿献堂さる。
- 8日 1873年 第9代目大管長デビッド・O・マッケイ生まる。
- 11日 1955年 デビッド・O・マッケイ大管長によりスイス神殿献堂さる。
- 13日 1898年 ロレンゾ・スノー教会の第5代目大管長として支持さる。
- 17日 1884年 ジョン・テイラー大管長によりローガン神殿献堂さる。
- 21日 1823年 天使モロナイ示現でジョセフ・スミスに現わる。
- 22日 1827年 ジョセフ・スミス、クモラの丘で神聖な記録を受け取る。
- 23日 1945年 ジョージ・アルバート・スミス大管長により、アイダホ・フォールズ神殿献堂さる。

チャーلز・ディケンズの長編「二都物語」は、200年前のフランス革命の時代のことを扱ったものであるが、著者はあたかも我々の時代を描いているかのように見える。この物語の背景についてディケンズはこう語る。

「それは最も良い時代であり最も悪い時代であり、賢者の時代であり愚者の時代であり、信心の時代であり懐疑心の時代であり、光明の季節であり暗黒の季節であり、希望にふくらむ春であり絶望の冬であり、我々の前にはすべてのものがありすべてのものがなく、我々すべてが天国を目指して進み我々すべてが別の道歩んでいる……」

我々のこの対照的な世の中においては、利益が増せばそれにつれて危険も大きくなる場合が多い。それはまるで恵みを受ける代価として困難が存在するかのようである。おそらくこれからの12か月は、この世が未だかつて経験したことのない重大な時期となるであろう。この来たるべき年の出生数はこれまでのどの年よりも多くなり、新発明もこれまでの最高の数となるであろう。我々はさらに多くの新しい事柄を知り、より多くの物質的な慰めを受けるであろう。これからの12か月に、未だかつてないほど多くの人々が大学に進学し、キリストの教会に加わるであろう。一方、以前にないほど多くの人々が死亡し、困難にあい、罪を犯し、麻薬や酒を飲み、罪にふけり、人間の魂を破壊する暴動を擁護し、自らの手で地獄へ送り込むのである。

我々は、各自その受継ぎから離れるべきではない。我々の受継ぎを知り、生活の中で常にそれを新たにする時、そこにはすべてがあるそして確かに我々は、自分が神の子であることを主張しながら、ひねくれ者や弱虫、ひきよう者や罪人のようにふるまい、世を渡るべきではない。大いなる良き働きにより、我々はこの年を最も素晴らしい年にし、この世にとって最良の時代とすることができるのである。また我々は、神への信心の時代、光明の時代、理性の時代、義の時代へ人々を迎え入れ地の上では、み心にかなう人々に福千年の平和をもたらす手助けをすることができるのである。

— も く じ —

最も重要な知識……………大管長	ジョセフ・フィールディング・スミス…	245
教育と教会……………	M・ダラス・バーネット副編集長…	247
家を離れる若者……………	エルウッド・R・ピーターソン…	250
福音の朝あげ……………	ローリン・F・フィールライト…	253
相反する原則……………	経営学博士 クイン・G・マッケイ…	257
ケンのおたんじょうびのおくりもの……………		259
まい子……………		260
決心——なぜ今することが大切なのか……………	スペンサー・W・キンボール…	263
やるとやらないの間で……………	リチャード・L・エバンズ…	264
4つのエベレスト……………	ビクター・B・クライン博士…	265
目と目のふれあい……………	デラ・メイ・ラスムゼン…	269
よきおとずれは響かん (小説) ……………	アイリス・シンダーガード…	271

今月の表紙

今月号は「教会における教育」の特集号である。表紙の写真は世界各地で行なわれている末日聖徒の学習活動を一部紹介したものである。

聖徒の道

1971年9月20日発行
 発行人兼編集人 ウォルターR. ビルス
 発行所 東京都港区南麻布5-8-10
 末日聖徒イエス・キリスト教会
 電話(442)7459
 印刷所 太陽印刷工業株式会社
 定価 100円
 予約 一年間 1,000円
 外国 4ドル50セント



最も重要な知識

大管長 ジョセフ・フィールディング・スミス

すべての人は毎日何か新しいことを学んでいる。あなた方は一人残らず、多くの分野について好奇心と真理を探求する心を持っている。私はあなた方のすぐれた探求が霊的な事物の領域内において行なわれることを切に望むものである。なぜなら我々がそこにおいて救いを得、天父の王国における永遠の生命へと至る進歩をなすことができるからである。

この世で最も重要な知識は福音の知識である。それは神と神の律法の知識であり、人が主のみ前で自らの救いを達成するために恐れおののいてなさねばならない事柄を我々に教えてくれるものである。我々に与えられた啓示の一つに、もし我々がキリストが天父にあってその栄光を受けられたように栄光を受けたいと望むならば、我々は礼拝の方法と礼拝するものとを覚り、知らなければならぬと教えている。（教義と聖約93：19—20参照）

私の望むところはあなた方に神がいかなる性質を持ちたもうか、またいかなる体を有したお方である

かを思い起こしていただくことである。そうすることにより、あなた方はみたまと真理により神を礼拝し、神の福音のあらゆる祝福を受けることができるであろう。

我々は神が啓示によってのみ知られ得るものであることを知っている。従って神は続けて啓示を与えておられるか、または永遠に知られずにいるかどちらかである。もし神に関する真理を学びたいと思うならば、科学者や哲学者ではなく事実中空を飛ぶ天使による福音の回復についてのヨハネの偉大な予言は、人が真の神の知識を受けるにふさわしい状態となり、それが人々の間に教えられるよう回復が起こることを述べている。「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」（黙示14：7）換言すれば、この神権時代において福音の回復を始めるにあたり、人は世に広まっている神への誤った概念を受け入れず、創造主に対して礼拝し仕えるよう求められるのである。

主の予言者はあらゆる時代において誤った教えと戦い、神についての真理を宣言するよう求められてきた。古代イスラエルには偶像や異教の神を礼拝する人々がいたがその人々にイザヤは次のように問いかけている。「それで、あなたがたは神をだれとくらべ、どんな像と比較しようとするのか」

「あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか、主はとこしえの神、地の果の創造者であって弱ることなく、また疲れることなく、その知恵ははかりがたい。」(イザヤ40:18, 28)

今日、世の多くの人々は神についてのこの知識を持たず、末日のイスラエルにおいてさえ永遠の父なる神である栄光あるお方について完全に理解していない人々がいるのである。この知識を持たない人々に対して、我々はこのように言うことができよう。

「なぜあなたがたは神の栄光に制限をつけるのか。またなぜ神が実際そうであられるよりも低く考えるのか。あなたは知らなかったか、あなたは聞かなかったか。主はとこしえの神、地の果の創造者であって限りなくかつ永遠である。そして神はすべての力と能力と、支配力とを持ち、すべてを知りあらゆる事物は主のみ前に存在するのである。」

予言者ジョセフ・スミスにこの神権時代において教会を再び組織するよう命じている教義と聖約第20章の中に、我々は啓示された根本的な救いの教義のいくつかを見るのである。神についてその啓示は次のように語っている。

「**・神天に在ますことを。この神は限りなく且つ永遠にして、とこしえよりとこしえに至り変ることなき同じ神にして、天と地とその中にあるすべてのものを仕組みたまし者なり。**」(教義と聖約 20:17)

また93章では、キリストは死すべき肉体を有していた時には天父の完きを受けず、恩恵に恩恵を加えられ、復活の後に天と地双方におけるすべての力を受けたことを教えている。そしてこの啓示は、天父がキリストより以前に受けたもうたごとく、キリストも「完き真理……すなわち、完全にしてあらゆる真理を受け」(教義と聖約 93:26) たもうたことを語っている。またこの啓示は、戒めを守る人は、真理の栄光を受けてあらゆる事を知るようになるまでにすべて真理と光明とを受けるといふ教義を宣言したのである。

神は我々の天父であり、我々の体は神のかたちに

創造された。神は、人間の有する肉体と同じく触知し得る骨肉の体を有したまい、(教義と聖約 130:22) 文字通り人格を有したもう全人類の霊の父なのである。神は全知全能であり、あらゆる力と知恵とを有したまい、その完全さは、あらゆる知識、信仰あるいは能力、正義、裁き、あわれみ、真理、さらにあらゆる神としての属性を有したもうことにある。これは予言者ジョセフ・スミスが「信仰篇と題する講話」¹の中で説いたものである。またジョセフ・スミスは、もし永遠の生命を受け、それにより完全な信仰を得たいと望むならば、我々は神がこれらの完全な性格、属性を有したお方であることを信じなければならないと説いた。私も同じように申し上げたい。神は限りなくかつ永遠のお方であり、変わることなく、とこしえよりとこしえに、つまり永遠より永遠にわたって完全なる能力と属性とを有したもうお方であると。

私は神と神の律法の知識が我々の時代に回復されたことに対して、また神が、ある宗派が言ったように「宇宙の霧のように浮かんでいる法の集積したもの」ではなく、人格を有したお方であることを教会員が知っていることについて感謝する。また神が天の父であり、我々の霊の父であり、我々に律法をお与えになり、我々が神と同じようになるまでそれに沿って進歩し向上することができることを感謝する。また、神がすべてのことを知り、すべての能力を有し、その進歩がより多くの知識や能力を得、より完全な神としての属性を得ることにあるのではなく、その王国を増大させることにある、限りのないかつ永遠のお方であるという知識を与えられていることを感謝する。これもまた予言者ジョセフ・スミスが説いたことである。

私は永遠の福音の真理に対して証する。私は、この末の日に神が語りかけられたこと、また終りの時に再びこの地上にご自身の王国を建てられたこと、そして神のあらゆる目的が広められることを確かに知っている。

我々が真理、特に霊的な真理を求める時に、主が一人一人を祝福し、繁栄させんことを祈るものである。

1. 予言者の塾でジョセフ・スミスが語った7つの講話。(1921年まで教義と聖約に含まれていた。)

教 育 と 教 会

M・ダラス・バーネット

副編集長

1 枚のつづれ錦の中に織り込まれている金色の織り糸のように、1830年にこの教会が回復された。その時以来、公式の教育は、末日聖徒イエス・キリスト教会の中に織り込まれてきている。

最初の教会の学校は、1833年オハイオ州カートランドで設立された予言者の塾である。また1840年にはイリノイ州議会からノーブーの市立大学の許可書が与えられた。その後デゼルト大学が1850年に荒れはてたソルトレークの盆地において開校された。それは聖徒たちが着いてから丁度3年後のことであった。以上は教会の組織された当初の25年間に教会によって創設された、3つの正式な学校である。

今日の教会の教育制度は、世界の至る所における末日聖徒の増大に事実その端を発している。宗教団体による教育は、世界的な批評を受ける制度の筆頭に位置するものであるにもかかわらず、世界の各地で教会による一般教育も発展させ得るというたしかに実際的な可能性もあるのである。

末日聖徒の若者に対する宗教教育は（中、高等学校での）セミナー、また（大学での）インスティテュートという形をとっている。教会の一般教育

のプログラムには、小学校、中学校、高等学校、実務学校、短期大学、4年制の大学が含まれる。宗教教育はこれらのおおのの学校において教課程の一部になっている。

過去20年間に学生数と施設は著しく増大した。しかし教会が現代の教育に具体的に力を入れ始めたのは、教会教育委員会事務局が再建された過去1年以内のことである。その管理上の変更によって教会員全員に中央を頭として教育がもたらされ、またすでにさまざまなプログラムに特別の焦点と方向が与えられてきた。

ニール・A・マックスウェルは教会教育委員長として働いている。彼は3人の委員、すなわちセミナーとインスティテュートでジョー・J・クリスチャンセン、大学と学校でケネス・H・ビースレー、財政と実務でデー・F・アンダーソンの補佐を受けている。

教会の教育制度において進展している教育観を理解するために、プログラムの範囲や領域を知ることは有益なことであろう。今年度（1970—71年）、教会ではメキシコ、チリ、ニューゼaland、トンガ、タヒチ、西サモア、フィジー、米領サモアにおいて58の小学校と中学校、7つの高等学校を運営

している。

これらの学校には、13,220名の学生が登録された。また、ペルーとボリビアにおける新設校の運営を含めて、来年度の学生数は17,000名を上回る予定である。

高等教育の分野において、教会は4つの大学をもっている。すなわち、ユタ州プロボにある学生数25,000名のブリガム・ヤング大学、ライエにある学生数1,300名のハワイ・チャーチ・カレッジ、アイダホ州レックスバークにある学生数5,100名のリックス・カレッジ（短期大学）、およびソルトレークにある学生数約800名のLDSビジネス・カレッジがそれである。

教会教育における最大の力は、少なくとも数において、セミナーとインスティテュートのプログラムにある。そこには176,000名の学生が登録されている。丁度10年前の1960—61年度には、67,671名の学生が登録されていた。

教会員に教育の機会を提供するために教会では3つの大切な事柄を考慮している。

大切さの順は考えずに、これらのうちの一つは、教会のすべての子供のための適切な公共学校教育に関するもの

教会の学校

1. ハワイ・チャーチ・カレッジ
2. タヒチ
3. 米領サモア
4. 西サモア
5. トンガ
6. フィジー
7. ニュージーランド・チャーチ・カレッジ
8. チリ
9. メキシコ
10. BYU, リックス, LDS ビジネスカレッジ

である。マックスウェル委員長は、読み書きの能力は福音にとって必要なものであり、基礎的教育なしには個人は福音を学ぶにあたって、不利な地位に立たされると語っている。

幸いにも教会員のほとんどは、公立の学校が基礎教育を与えている地域に住んでいる。しかしながら、公立の学校が不十分な地域に末日聖徒が集中している場合、あるいは若者たちに適当な訓練を提供できないような特別な状況下にある地域に、教会は小学校やある場合には中学校を設置することを考えている。

2番目の主な点は、末日聖徒の若者の高等学校後の訓練である。教会はこの点に関して偉大な役割を果たしてきた。特にブリガム・ヤング大学は世界の主要な大学の1つにまで発展したのである。同時に、教会のすべての会員に大学での訓練を与えることのできる道はないということが認められた。

「現在世界の大学には200,000名以上の教会員がおり、また現在の教会の施設は約32,000の学生にしか提供できない」とマックスウェル委員長は述べている。彼はまた、この年代の人々は教会において急速に成長している人々であると付け加えている。

「私たちは教会員がいるすべての地

域に教会の大学を設けることはできない。それは実に不可能な事である。これは、1970年1月に大管長会がセミナーとインスティテュートのプログラムを確立するために、できるだけ早くかつ合理的に活動するよう私たちを促した理由の1つである。これによって、宗教教育が与えられ世界中の私たちの高校生や大学生が力づけられるであろう。」

これによって第3番目の点が導き出される。すなわち、宗教教育がそれである。教会の管理幹部によって指示されたように、この点に関する方針として、「私たちの家庭、伝道部、ステーク部を支持するために、可能な限りいつでも教会員が出席を続けられるよう」セミナーとインスティテュートのプログラムを広めるべきである。

その他の教育面の発達と関心を減ずることなく、セミナーとインスティテュートは、世界中の教会員の生活に影響を及ぼして大きな成果をあげている。

家庭学習セミナーの試みが合衆国の中西部とニューイングランドで行なわれてきた。そしてこれは非常な成功をおさめたので、同じようなプログラムが英国やヨーロッパ、ラテンアメリカ、極東で進められる予定である。このことは結局、高校生の年令の世界中の末日聖徒が週日の正式な宗教的訓練の機会を得られるようになることを示

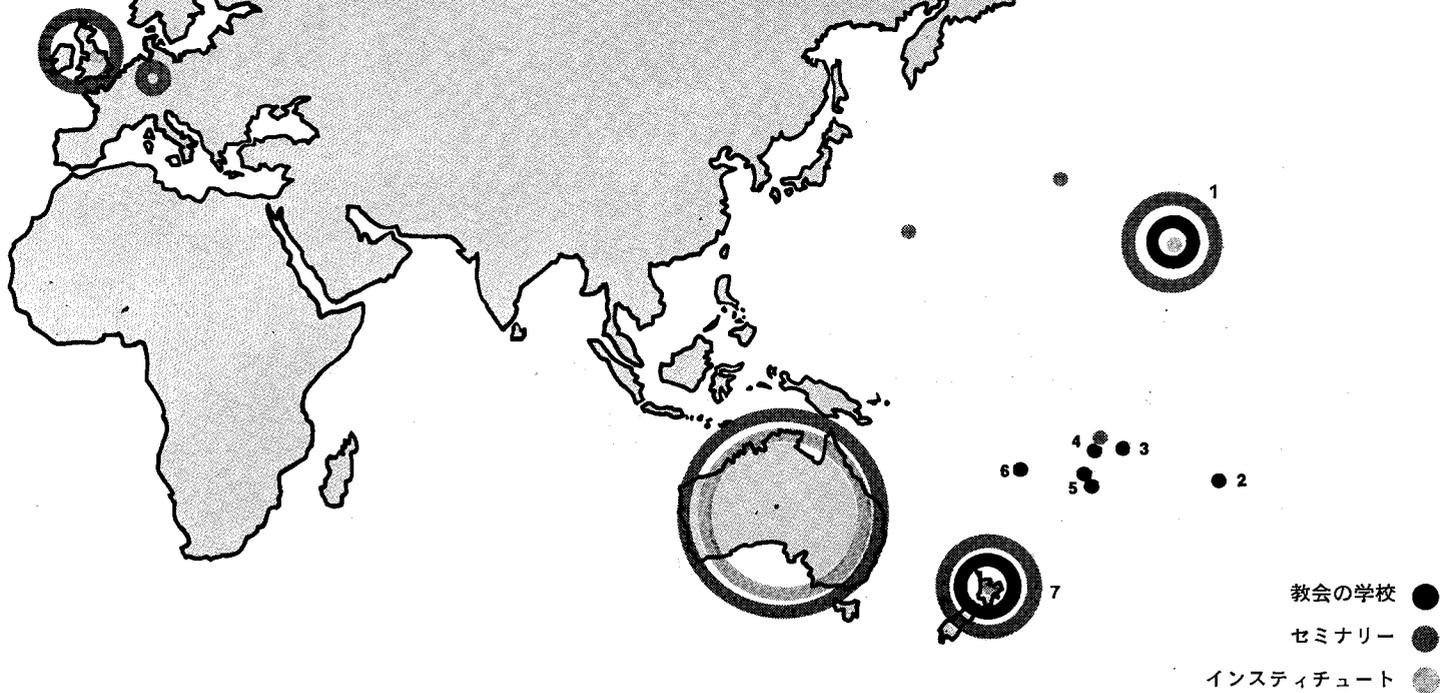
している。

家庭学習プログラムによって、各個人はレッスン資料を受け、ワード部または支部から召された教師と共に週に1度集会をもち、また地方部、ステーク部、地区単位で月に1度集会をもち、後述の集会はセミナーの組織で雇用されるフルタイム指導主事によって指導され、若者たちを動機づけ、他のセミナーの学生と親しく交わらせるように計画されている。さらに、奉仕で働くワード部と支部の教師は指示と援助とが与えられる。

末日聖徒が高等学校後の教育に注意を向けるとき、その人はあるむずかしい選択に直面する。まず最初に、自分の興味と必要性に最もよく合った教育に関心を払わなければならない。教育関係者を含めて教会の指導者は、大学の教育が必ずしも備えをする最善のあるいは唯一の方法ではないことを認識するよう両親と若人の双方に勧めている。

しかし大学を目ざしている若人にとっては、期間だけでなく、場所が危急





の問題になっているのである。教会では、強要はしないが、カレッジのはじめの2年間はできるだけ家庭の近くの学園で送るよう勧めている。先に述べたように、教会の大学では出席を望むすべての人々のための余地はない。このことが、教会が末日聖徒の大学生の集中しているところにはどこでもインスティテュートのプログラムを提供しようと努力している理由なのである。

マックスウェル委員長が、この特別な問題について考えているように、救い主の訓令は、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることであった。(ヨハネ17:15参照) 福音の中にある望みは、人々が世に抗するのを助けることであり、また多くの学生にとって、充実したインスティテュートのプログラムを通じて学ぶ一般教育は世に抗する備えとして健全な道となるであろう。

「全教会教育プログラムは、教会員の実際の必要を満たすために設定された指針に従って発展するであろう」と彼は指摘している。

彼は宗教教育のプログラムの中にある根本的な教理の心髄と諸概念の不変性により大きな信頼をよせている。しかし同時に、このプログラムは、世界中の人々の文化的必要を満たすために国際化されるであろう。

事実、マックスウェル委員長は、教会の教育を世界の至る所に住む教会の指導者の進歩と養成のための、重要な一手段と考えているのである。「私たちはまず指導者を見出し、次いで彼らのために高等教育を行なう道を開く必要がある。それは自分の国で行なわれても、教会の大学の一つで行なわれてもいづれでもよい。」

マックスウェル委員長とその委員が教育制度について心に描いている目標の中に、教授の交換がある。「もし世界のある地域であるプログラムに従事している非常にすぐれた、靈感あふる教師が、生徒たちを強めるためにある期間他の地域に移って他のプログラムに従事することができれば、生徒たちに多大の利益がもたらされるであろう」とマックスウェル委員長は付け加

えている。

教会の教育制度について述べ、またその教育観について検討する時には、公立の学校に入学を許された後数年して、ニュージーランドの教会の学校で自分の能力を見出すべく入学したマオリの少年の話は含まれていないのである。また、それに関する記事には、教会の学校に通ったメキシコの若者にとって、読書できるということがどれほど素晴らしいことかということについて全く述べられていない。

高等学校のセミナーの教師が教会員でない一人の若者に及ぼした影響によって、アリゾナに住むインディアン家族が劇的にその生き方を変えた、ということは学校制度に関する統計の中には現われない。また、ぐらついた信仰を持っていた大学生たちが、分別あるインスティテュートの教師によって幾度も励まされてきたこともここには全く示されない。

実際この種の事柄は、教会教育の本質、すなわちよりよい生活とより強い証なのである。

家を離れる若者

エルウッド・R・ピーターソン

両親 親達の目標の1つは、子供達がやがて独自の道を選び家から離れる日のために、子供達を備えることである。その別れは、子供達が結婚したり学校に入ったり、宣教師として働いたり、あるいは仕事を見つけたりすることなどの理由からやって来る。

若者自身の計画や準備、そしてやりとげようという気持が、家を離れて成功するか失敗するかに直接影響するのである。両親はこのことに大きな責任を感じるべきである。準備は生涯をかけてのことではあるが、若者の出発に先だち考慮すべき多くの段階がある。まだ本当に若い時から子供達はお金の扱い方を教わり、遊ぶためにお金を使うだけでなく、服を買ったり、学費を払ったり他の必要なものを買ったりするという責任も教えられなければならない。

若い人々は予算をたて、その範囲内で責任を持って生計をたてるよう教えられるべきである。予算額を使い果たし余分なお金が与えられなかったり、あるいはまた割りあてられた額より少な目に使ったためお金が余ったりすれば、彼らはすぐにその真の価値を知ることであろう。それは子供達に家庭を維持するのにさまざまな費用がかかるのを納得させる尊い経験となるであろう。男の子も女の子も料理、洗濯、家の掃除などを通して得るものがあるはずである。

正直な労働の価値と喜びを知ることがかけがえないことである。マーケットで働く若者に対する雇用の大きな不満は、彼らがどのように働くかをまったく知らないということである。若者がいろいろな仕事を経験することは重要なことではあるが、た

ピーターソン博士はブリガム・ヤング大学の教育心理学の助教授であり、現在大学から定期の1年の休みを受け教会社会事業部で訓練主任として働いている。彼はまたプロボのシャロン東ステーク部会長の第二副ステーク部長でもある。



とえどんな場にあってもたゆまず働き、良心に従い最善を尽くすことも大切である。この他に大切なことは時間厳守、良い身だしなみ、そして目上の人を尊敬することである。いったん若者が独自の道を歩んだなら、彼らは教会の標準に関して決心をしなければならぬのである。もしも彼らがまだ家にいる頃から自主的に教会に出席し、良い友達を選び、教会の標準を守っているならば、彼らはどこに行こうとも恐らくそれらを続けていくことであろう。彼らはまた積極的に自分自身で祈りを始めなくてはならない。普通、両親にとって子供を手放すことはつらいものである。しかし、そのような問題が起こった時に、両親はその行動の過程を詳細にわたってじっくりと話し合うことが必要である。両親と若者は両者の立場から賛否の論議を考慮しつつ、おたがいに耳を傾け合うべきである。不一致も予期されるであろうが、それは議論的ではなくうちとけて話し合わなくてはならない。この話し合いは家族全員にとって非常に意味ある経験となるであろう。一般にすぐさま決定しないことが、最上の方法と言える。仮に結論を出しても、それはすべての関連事項について熱心に祈った後に再び検討されなくてはならない。

いったん、若者が家を離れるという決心がついたら、両親は若者にできる限りの激励と支持を与えていると感じさせなければならない。両親の協力と祝福を得ているならば、より大きな成功への可能性が



生まれることであろう。また成功と失敗の両方の可能性をも予期して、それらにどのように対処すべきかを考えるべきである。

若者の求めている機会をできるだけ家の近くに見つけることが望ましい。家の近くに住めば、週末や休日に訪問したり、電話で両親と若者が簡単に連絡し合えるからである。職業の種類とか教会の支部やワード部への近さなどを考慮に入れて住む場所を決めなくてはならない。宿舎に住むと決めた場合には仕事場や教会、買い物や娯楽施設への近さも考慮に入れるべきである。

また建物の質だけでなく、近所の人々がどのような人々かを知ること大切である。矛盾のない標準を持つルームメイトとは経費を分け合うだけでなく共に大きな友情を経験するであろう。

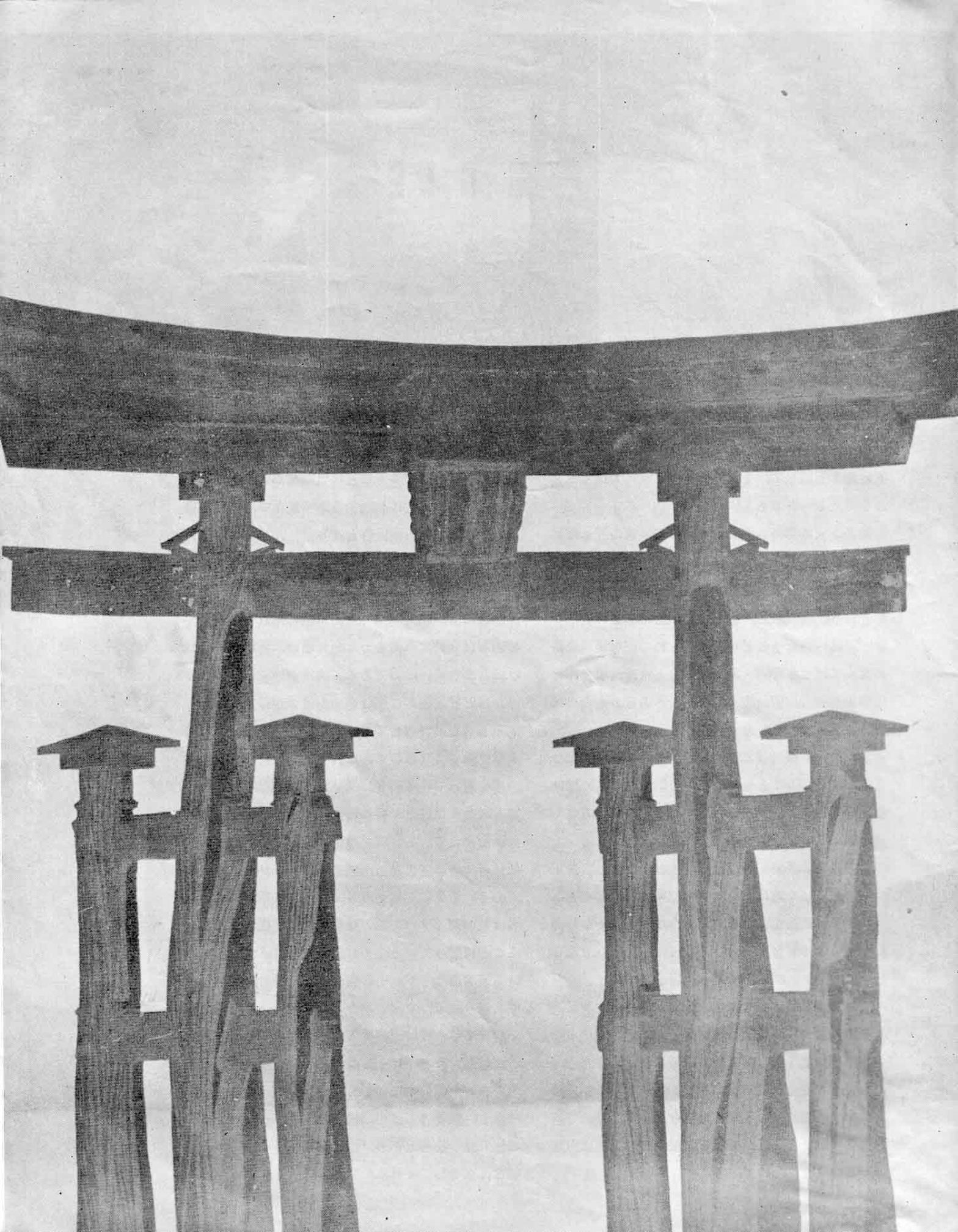
立派な家は普通かなり高く、住むのに余分な費用がかかる。家を離れて職につき、最初の給料をもらうまでには期間を要するので、少なくとも2か月間は生活できるお金を前もって持っていなければならない。

家を離れる計画をしている若い人はその大切な決心をするために監督と相談すべきである。ワード部の監督は決定を下し、準備するのに価値ある忠告と提案を与えてくれるはずである。ワード部の1人の若者が家を離れるのを知ったなら、監督は通信で連絡を保ち続けることができる。家からの手紙は力強い影響を及ぼすものである。

両親が家を離れている子供達の様子を彼らの監督に絶えず知らせておくことは賢明なことと言える。両親はまた個人的に訪問するか手紙かで、彼らの息子や娘たちの新しい監督と知り合い、家を離れている家族の一員が教会の活動でどのように進歩しているかに関して、定期的に尋ねるべきである。

不幸にも、職業につくために家を離れている多くの若者は十分に準備をしないために、悪い影響を受けてしまっているのである。満足のいく仕事につけなかったり、適当な住む場所が見つからなかったりすると彼らは失望して、良くない友達や環境の影響を受けやすくなるのである。

家を離れている若者に関連する深刻な問題を認めて、教会では彼らが悪の可能性を避けるよう助ける計画を備えている。家を離れて住んでいる若者の責任は、その若者自身と両親と監督にかかっているのである。教会のプログラムでは、家を離れている若者は彼の前のワード部の監督に新しい住所を知らせることになっている。それから監督は「家を離れている若者のカード」を作製し、それを教会社会事業部に送り、そこでだれがその人の新しい監督になるかが決まり、彼に連絡することになっている。若者が到着したことを知らされた新しい監督は、その若者をワード部の中に親しく招き入れるようにするのである。監督はしばしば適当な家やルームメイトのことで助けを与えたり、仕事に関することにさえ有益な提案をしてくれるのである。



福音の朝あけ

ローリン・F・フィールライト

フィールライト博士はブリガム・ヤング大学の芸術学部長であり、1956年以来日曜学校中央管理会会員である。

「夜 あけだ、朝あけだ。」¹

このパーレー・P・プラットによる予言的な讚美歌は、福音の朝あけの地日本で「シオンの旗はひるがえる」ごとく実現しつつある。

日本の大阪で開かれた万国博に來た6,500万人のうち、10人に1人がモルモン館を訪れている。宣教師達はそこで暖かい歓迎の手をさしのべ、イエス・キリストの福音を知りたいと願う数10万の人々と会ったのである。

70年前にヒーバー・J・グラントによって日本にまかれた種は、今や実を結びつつある。人口1億500万人を有するこの国に、1万4千人以上の教会員がいる。この国を訪れた人は福音のいぶきが古代の国に新しい生命をもたらしていると深く印象づけられて帰っていくのである。日本人は力強い献身的な民である。新たな福音の夜明けの光が極東を照らすのをまのあたりにして、信仰が活気づけられるのをおぼえる。

私はエラスタス・レオン・ジャルヴィスに会ってから、初期の宣教師達の抱いた失望と私達の現在の成功との好対照に気がついた。彼は現在87歳であり後に教会の第7代目の大管長となったヒーバー・J・

グラントと共に日本で伝道した宣教師たちの中で唯一の生き残りである。彼はグラント大管長に随行した初期の3人の宣教師達、ルイス・A・ケルチ、ホーレス・A・エンサイン、アルマ・O・テイラーについて語ってくれた。彼は私に1903年4月付の日記を見せてくれた。横浜のYMCAから集会所を借りようとする努力は、はじめ承認されはしたが後で認められなくなったのである。グラント大管長はその説明を求めたが、次のような手紙が送られてきたとジャルヴィスの日記に記録されている。「あなたにお電話を頂いた時、私はあなたがたが関係されている教会を知りませんでした。私どもはあなたがたの望んでおられる目的のために集会所を使用することをここに慎しんでおことわり致します。敬具。U. スミ」

当時の宣教師達は辛抱強く働き、彼らに続く、若者達もみな同じように働いた。そして今や状況は一変したのである。万博会場のプロテスタント、カトリック教会共同によって出展されたキリスト教館で、私は簡単なオルガン曲を弾く機会に恵まれた。私は「恐れず来たれ聖徒」²で始め、バッハ³の曲や他の有名な作曲家の曲をひき末日聖徒の讚美歌で終えた。非難の叫び声はなく、友情と相互理解の気持で人々はその場に集まっていた。1組の若い男女が手を差しのべる機会を待っていたが、彼らは目に涙を浮かべてこう言った。「私達も会員です。」その瞬

1. 末日聖徒讚美歌 189番
2. 末日聖徒讚美歌 23番
3. バッハ, ヨハン セバスチャン
ドイツの作曲家, 音楽家 1695—1750
4. 末日聖徒讚美歌 189番



大阪の岡町支部で日曜学校の教師をしている安芸美江子姉妹のクラスには、レッスンの間中暖かさと熱意がみなぎっている。彼女の教師としての成果がクラスの生徒：水口滋兄弟、古田美恵子姉妹、石丸千恵子姉妹、天ヶ瀬由美子姉妹、野准子姉妹たちの顔に反映している。

間、私は日本人会員の末日聖徒イエス・キリスト教会の会員としての喜びと誇りを強く感じたのである。天皇陛下の弟君がモルモン館を訪問された時、私は幸福の探求の映画をともに見る特権にあずかった。彼の静かでありながら非常に印象的であった。彼はバーナード・P・ブロックバンク長老とエドワード・Y・岡崎伝道部長に会われ、鈴木正三兄弟から展示物に関する説明を聞き深い関心を示されたようであった。私はその後、日本中央伝道部の第一副伝道部長である鈴木兄弟から天皇陛下の弟君三笠宮崇仁殿下と共に写っている自分の写真を8枚ほどほしいと連絡を受けた。それは鈴木兄弟の8人の子供達の記念の書に加えるためであった。彼はこう書いている。「これは非常に名誉なことです。皇族と共に写真を撮ることは日本人にとってはまれなことであり、私の家族のだれもまだ経験していません」1903年に集会所の使用が拒否されて以来、教会は社会的な尊敬を得てきている。

私は日曜学校中央管理委員会会長デビッド・ローレンス・マッケイにより、東洋での最初の地区集會に中央管理委員会を代表して参加する責任が与えられ、初めて日本を訪れたのである。日曜学校での経験を得るため私は東京ステーク部の第3ワード部を訪問した。各クラスを訪問してみると、多くの生徒達はテキストを開いて福音を勉強していた。視覚教材も豊富に使われ、特に子供日曜学校ではそれらが最大限に利用されていた。

私は後に東京ステーク部ではもう図書計画が始められていることを知った。またステーク部の会長である八木沼修一兄弟は、全会員と求道者が福音を正しく学べるように日曜学校のあらゆるプログラムを力強く遂行しようとしていた。地区集會のために彼と東京ステーク部の会長会は「すばらしい召し」というフィルムを受け取ったが、わずか1週間で完全な翻訳をなし、吹き込みをやったのである。集會で、彼らは画面とテープの言葉を完全に合わせて映画を上映したのである。この困難を克服しようとする心意気は、日曜学校に全力を尽くして励んでいる彼らの努力を物語っている。

大阪では、日本中央伝道部の岡崎伝道部長と岡崎姉妹の招きにより、教師養成会を指導し岡町支部を訪問する機会に恵まれた。日本での日曜日は、キリスト教徒の国々の休日とは異なるので、神戸と大阪間の高速道路は非常に混み、私達は少々遅れて着いた。丁度クラスが始まろうとしている時に私達は形式ばらずにクラスに入っていった。手に持ったカメラで、私はいつまでも忘れることのできない日本人の教え子を写し取ることができた。このページにその数枚の写真をのせている。

私は安芸美恵子姉妹の生き生きとした顔を見ていて、そこにまわりの人々を魅了している力を感じた。私は横を向いて若い学生達が彼女の伝える言葉をどう受けとめているかを見たが、彼らはみなレッスンに魅了されていた。私は静かに彼らの方向にカメラを向け、今までで最高と思われるありのままの姿の日曜学校の写真を撮ることができた。これらの美しい東洋の若者達の写真を見て、ブリガム・ヤング大学の私の同僚はこう言った。「私は第二次世界大戦の時に日本に上陸した最初の一団の中にいました。でもその時は、このような顔は全然見ることはできませんでした。これらの人々の目には、当時見られなかった光がある。それは福音の光だ。」

私は安芸姉妹の顔の表情をよく見ていて、黒板の上に書かれている聖句の意味を伝えたいという願いと、生徒達はその意味をつかんだ時に示す喜びの気持を感じ取ることができた。それらの顔の表情は、真理と効果的な教え方が一つになって生活を照らす時に、生徒と教師がどう感じ合っているかを言葉以上に雄弁に語ってくれる。また、この支部には盲人ではあるが他の人々に道を照らしている特筆すべき教師がいた。私があるクラスをのぞくと、そこでは伊藤清兄弟が閉じたカバンを持ってレッスンをしていた。後で会って話した時、彼は完璧な英語でこう言った。「私は生まれてからずっと目が見えません。耳と指を通して以外は何も見ることができません。私は小学4年生の時にピアノを習い始めました。ピアノ用に点字の楽譜があります。私はそれを使って学びました。楽譜を覚えるまで、私は片方の

手で点字を読み他方の手でピアノを弾きました。ですから覚えるまで他の人々よりも長くかかりました。」

彼は教会への改宗談を話してくれた。「私は今35歳です。1950年に私は電車の中でアメリカの姉妹宣教師に会いました。彼女の名前はルース・K・ニードハムと言い、同僚はクラーク姉妹でした。彼女達は私にMIAや日曜学校がどんなにすばらしいかを話してくれました。そうして私は1951年にバプテスマを受けました。私は1955年から1970年まで多くの支部でオルガニストとして働きました。私は今年それを解任されて日曜学校の家庭の夕べのコースの教師に召されたのです。」

私は彼にどのようにしてレッスンの準備をするのかを尋ねると、彼はこう答えた。「それが問題なんです。あなたたちは聖書や他の聖典を楽に読めますが、私にはできません。私はこの責任を頼まれた時に一度断りました。自分にとってあまりにむずかしすぎると思ったからです。でも最善を尽くそうと決心しました。私は妻にテープを作ってもらってレッスンの準備をしています。彼女が本の内容を全部録音したものを私が毎日聞きます。たとえば来週のレッスンのために妻が今晚録音すると、私はそれを明日から聞き始めるのです。必要な時には妻が聖句を読んでくれます。彼女はレッスンを読み私は聞きそれから点字でノートを取るのです。」

「教えるのは楽しいですか。」という私の問いに、彼らは答えた。「私は3月から教えてきていますが最初の数か月は少しも楽しいとは思いませんでした。というのはテキストを見ないで、テキストを見ることができる人々と同等にできるかどうか不安だったからです。私は妻に私と共に祈ってくれるように頼みました。そして私は確かに主から助けを受けました。今、私は教えるのがとても楽しいです。またレッスンの内容もすばらしいものです。それらは私が自分自身の子供を育てるのに大きな助けとなっています。」

この簡単な話からだれでも伊藤兄弟と姉妹との間の深い霊的なつながりに気づかれるであろう。私は

彼らがどのようにして知り合い、結婚したのかを尋ねた。彼は1年に4回神戸で開かれる地方部大会について私に話し始めた。「その大会で私達は出会いMIAや日曜学校ですばらしい時を過ごしました。」それから彼は言った。「彼女にきいて下さい。」姉妹は英語を話せなかったので他の人々が2人のことを話してくれた。この献身的な妻であり母親である伊藤姉妹は、みだりに動かされてある大会の後で伊藤兄弟に手紙を書き、生涯ずっと彼を助けたいと告げたのであった。彼らは後に結婚し、神殿で結び固められた。彼らの間には現在10歳になる女の子が1人いる。

彼は前にはナイトクラブでピアノを弾いて生計を立てていたが、安息日を守るためにその仕事をやめたそうである。今彼は家で英語とピアノを教えている。どのように英語を学んだかという私の質問に彼は答えて言った。「ラジオを通してです。20年間私はラジオの英語会話を聞きました。私は本当に英語が話しかつたのです。私は英語が大好きです。私はなんとかして学ぼうとしましたが、習うだけの十分なお金がありませんでした。ですからラジオを聴く以外に学ぶ方法はなかったのです。」彼の英語の発音は他の多くの日本人にくらべてはるかに勝れていた。

どのようにして讚美歌を弾くのを学んだかを尋ねた時に彼は言った。「私は良く聞くようにします。」伊藤兄弟は目こそ見えないが、偉大な真理と大きな幸福を見出すことを学んだのである。なぜなら彼はラジオの英語の教師や演奏したいと思う音楽に耳を傾けることを学んだばかりでなく、妻や電車で会った2人の姉妹宣教師にも耳を傾けて学び、イエス・キリストの福音を通して光と愛の全く新しい世界を開いたからである。

日本人の力強い精神の中に私達はパーレイ・P・プラットの言葉が成就するのを見ることができる。「あかるい夜あけだ、敵にあまねく朝日は昇りゆく」日本には新たな光がある。それは幸福そうな顔に輝きあふれ、人々に平和と善意をもたらすキリストの福音の光である。(ルカ2:14参照)



相反する原則

経営学博士

クイン・G・マッケイ

全生涯を通して、ジョージは真理を語るように、また正直であるようにと教えられていた。また彼はいかなる神の子であってもその感情を害してはいけないと学んでいた。ジョージが結婚してから1年近くたった時、その出来事が起こった。ある夕方、

マッケイ博士はテキサス・キリスト教大学の特別な講座、すなわちアメリカ企業経営のデビッド・L・ダンディー講座を受け持っている。彼はまたアメリカの官公庁、民間の社団法人教育研究所などのコンサルタントでもある。教会においても監督、宣教師、教師などの職務を果たしてきており、現在フォート・ワース・ステーキ部の日曜学校管理会長である。

彼の妻は玄関で彼を迎えて夢中になって言った。「あなた、居間へ来て私がきょう買ってきた新しいランプを見てちょうだい。きっとあなたも気に入るわ」居間のテーブルの上に置いてあったのは古めかしい奇妙な形のランプだった。大きな期待を持って彼女は尋ねた。「お気に召したかしら？」彼は内心それをぶかっこうだと思ったが、そういう反応を示せば妻はがっかりしてしまうだろうと思い、素直に自分の気持ちを表現するのを差し控えた。

ジョージはふとロバート・ルイス・スチーブンソン¹の言葉を思い出した。「真実を述べることは、ただ事実を申し立てることではなく、真の印象を伝えることであ

る」この場合、ジョージは何と言ったら良いのかわからなかった。妻の心を傷つけないために、それが気に入ったというべきであろうか、それとも彼女に本当のことを言うべきであろうか。

そのような重苦しい板ばさみから脱してはっきりと自分の思っていることを言うのは容易である。けれどもそういうことをすれば他の人の感情を害してしまうし、また実生活へ福音を取り入れることにおいてもあまり適切ではない。どれが正しいかを決定することは時には非常に困難きわまりない。しばしば困惑が起こるのは「相反する原則」が形となって現われることによるのであり、すなわちもし人がある原則に従うならば、やむなく他の原則を犯すことにも

なり、私たちは2つの共に正しい原則の間に立って身じろぎできなくなってしまうのである。これらは夜も眠れなかったり、罪の意識を感じたり、くよくよしたりするほど、実にむずかしい決断である。日曜日にとるべき行動として、あるもの（聖餐式への出席）は明らかに正しく、もう一方（映画へ行くこと）はまぎれもなく誤りであり、そのようなことは生涯においてさして問題ではない。困難な決断というのは、どちらが選ばれても両者共に正しくもあり誤りでもあるようなものことなのである。

相反する原則において、それらが現在いかなる状態にあるかということを確認することは、私たち自身を主の教えのうちに保たせる。予言者リーハイが「それは、すべての物事には必ずその反対のものがなければならぬからである」（Ⅱニーファイ 2：11）と述べた時に、リーハイはいくぶんこの相反する原則の概念に言及しており、またこれが私たちを霊的により強くするための主の計画の一部であることは明らかである。肉体には筋肉がついており、それらは互いに、あるいは重力に対して抗する力を持っている。抵抗力（反発力）は強健な身体を作る。もしすべての決断がはっきり「正」とされるもの、はっきり「誤」とされるものだけであったならば、私たちの霊的な筋肉作りはできず、それほど強くはなれないであろう。主は人がより多くの知識と経験とを単純で明確な選択から得るよりも葛藤を通して得ることを望まれ、そこで主はそれをこの世に備えられたと思われる。もしそうでないとすれば、なぜ主は相反する原則を初めにアダムとイヴの前に課したのであるか。主は最初の人間にふえよ地に満ちよと命じたまい、またそれと同時に善悪の木の実を食べないように命じたもうた。一方の戒めに従えば他方を破らなければならなかった。

私たちは絶えず次の例のような葛藤に直面している。

1. 18才になる求道者はバプテスマを受けることを切望しているが、彼の両親は賛成しない。原則a：悔い改めてバプテスマを受けよ。原則b：両親に従いなさい。

2. ある父親はカブ・スカウトに入っている息子に隊集会に出席するという約束をした。ところがある官吏からその父親に電

話があり、空港で長官と会って外国の高官との通訳をしなければならなくなった。原則a：父親は息子との約束を守らねばならない。原則b：彼は社会と国家に対して負っている責任を遂行しなければならない。

3. ある社長は売上げ不調期間中、価格を下げるために従業員を一時解雇しなければならない。9人の子供をかかえている男も解雇されることになっている。原則a：人々を苦しめたり、不親切であってはいけない。原則b：重役会議で決定された通り、株主への5%以上の配当を確保しなければならない。

4. ある青年が戦場で敵と直面した。殺すべきであろうか。原則a：あなたは殺してはならない。原則b：青年は自由を守るべきである。

5. 15才の少年に学校で新しい友だちができた。ところがその友だちは幾つかの悪い癖を持っており、その少年の家庭は複雑だった。両親は息子のこの友情を励ますべきであろうか、それとも否むべきであろうか。原則a：悪い交際や悪影響をさげなさい。原則b：あなたの隣人を愛し、友人のない者の友となれ。

6. クラブ会館で機会があって、ある会社の部長は社長から、「副社長は金のやりくりがうまいかね」と尋ねられた。その部長は正直なところ副社長は金銭のやりくりがじょうずではないと思っていた。彼は何と言ったらよいだろうか。原則a：目上の人に対しては忠誠を尽くしなさい。原則b：自分の言うことに正直であれ。

さて次にあげるのは相反する原則によって生じた問題をうまく処理するための段階である。

1. どの原則が相反するか正確に明らかにする。

2. どの原則がその場合、他よりもより重要であるかを考える。私たちはある原則が他の原則よりも重要であることを知っている。たとえば「あなたは殺してはならない。」と「あなたは偽証してはならない。」とは何ら相反することはない。

3. 2つの原則が相反している時には、より高度な律法を選び従う。これは確かにアダムとイヴが選んで木の実を食べた時に行なったことであり、ニーファイがレーバンを殺した時に行なったことであり、また

救い主が姦婦を許した時に行なわれたことである。そして、より高度な律法に従うための重要な鍵は、祈りを持って決断に近づくことである。

この相反する原則の概念を適用しようとする時に、苦悩があらゆる決断を下すことにつきまとうけれども、その苦悩はよりよい選択をする助けになるであろう。どちらの原則がより重要かをすぐに見分けることができる時には、決断は下しやすい。諸原則のどれがその場合、より大切であるのか雑然としていればいるほど、そのどちらがより高いものであるかを確認するのはむずかしい。たとえば、ある人は日曜日も営業する店で働いている。彼は転職することもできるが、そうすると給料が2割下がってしまう。それは非常に困難なことであるが彼の家族はその安い給料でも何とかやっていけるであろう。ここに教育や音楽のレッスン、また休暇のような事柄に利用できるお金に対する安息日遵守の律法がある。彼はどうすべきであろうか。

合理化すること、すなわち非常に楽なことをするのは容易である。しかし救い主は人の道が容易であるとは約束されなかった。

人間は厳格な律法によっては生きてはいけないという人も中にはいる。そういう人たちは環境が人のなすべきことを決定すると主張している。社会的または経済的圧迫のもとにあって、合理化するということはしばしば理にかなったことであると誤解されている。

それは、私たちの判断によって、最も福音の原則と一致したものを選ぶにあたってどれがより適切であるかを考えることが問題となる。それらの原則は謙遜な精神によって最もよく運用される。すなわち祈りと断食とによって、導かれるであろう。マリオン・D・ハンクス長老は次のように言った。「さして必要でないことにかかりわづらって最も重要なことを忘れないようにしなさい」選択は時にはむずかしい。しかしまた一方では原則にそった生き方をするのは決してやさしいことではない。

1. ロバート・ルイス・スティープンソン — スコットランドの小説家、随筆家、詩人。1850—1894。

ケンのおたんじょうびの おくりもの

「ほくのおたんじょうびがやってくる」とケンがいました。
「そうだね。わしはおまえにおくりものをあげようとおもっているんだよ」とおじいさんはいました。

「それはなあに？」とケンはききました。

おじいさんは「それは大きくなるものだよ」といいました。

「こいぬかな？ こいぬだったらいいな」とケンはいました。おじいさんは「そうだ」とも「ちがうともいいませんでした。

そして「ケン、いろんなものが大きくなるんだよ」といいました。

「それじゃあ、こねこかな？ こねこがいいな」とケンはいました。おじいさんは「そうだ」とも「ちがう」とも

いいませんでした。おじいさんは「たんじょうびになったらわかるよ」といいました。

「おじいさんが大きくなるものをくれるんだって。うまだったらいいなあ」とケンはおかあさんにいきました。

するとおかあさんは「さかなのほうがいいわね。それとむねこ鳥のほうがいいかしら」といいました。ケンは「うまにのれたらいいな」といいました。

「おじいさんがほくに大きくなるおくりものをくれるんだって」とケンはおとうさんにいきました。「それはよかったね。おじいさんはおまえにおかねでもくれるのかい？」とおとうさんはケンにいきました。

「ちがうよ。おかねは大きくならないもん」と、ケンはいきました。おとうさんは「おかねだってちよきんしておけば大きくなるんだよ。おまえがおおきくなるまでにおかねもゆっくりとふえていくだろう」といいました。

ケンはおたんじょうびをまじました。おじいさんはケンに、こいぬをくれるのかしら？ それともこねこかな？ うまかな？ さかなかな？ ことりかな？ それともおかねかしら？ ケンはおたんじょうびをくびをながくしてまっています。ケンはおたんじょうびがまじきませんでした。でもやとおたんじょうびがやってくる、おじいさんはケンにたけのたかいかいにもつをもってきてくれました。ケンにはとてもたかすぎてささえていられませんでした。「これはこいぬじゃないな。それにこねこでも、うまでも、さかなでも、ことりでも、おかねでもないや」とケンはいきました。

「そうだよ。それはそだてるものなんだよ」とおじいさんはいきました。ケンはおじいさんといっしょにそのせのたかいかいにもつをほどこきました。

「あ、木だ！」ケンはさげびました。

「そうだよ」おじいさんはうなずきながらいきました。「さあ、あなをほってこれをうえよう。ていねいにな。これはおまえとおなじようになんかもおたんじょうびをむかえるだろう」

「ありがとう、おじいさん。おたんじょうびの木をほんとうにありがとう」とケンはいきました。



まい子



作：シンシア・チェンバレン

絵：ロナルド・クロスビー

家族の食事のためのパンを買いに行くことが8歳になったシモンの役目でした。かれは他の少年たちといっしょにゲームをして遊びたかったときが何度もありましたが、いつもよるこんで市場に行きました。そこにはいつもおもしろいものがたくさんあり、エジプトやアラビアからしなものをもって隊商がやって来るときはまたかくべつでした。

かれはいつものように町の中心に通じているせまい通りを急いで下って行ったのですが、きようはシモンにとっていつ

もよりいっそううれしい日でした。きのうかれは「えらい先生」の教えを聞きに家族といっしょに出かけたのでした。

友だちがこの人について、またその教えについてシモンのおとうさんに話したのでした。そこで家族みんなでその人の話を聞きに出かけたのです。シモンは草原の上にみんなといっしょにすわり、イエスが天のおとうさまはどんなに私たちがあいしてくださるか、そして私たちはいかにおたがいにあいしあい、助けあわねばならないかを聞いたことを思い出し

ていました。イエスの声はやさしくおだやかでしたが、ぐんしゅうのひとりびとりが聞くことのできるはっきりした声でした。シモンはまたイエスのことばに耳をかたむけているときどんなに幸福だったか、また教えを聞いたあとでいつも教えに従った生活をしようと決心したことなどを思い出していました。

このことがシモンにとってきょう特にうれしいことの原因になっていました。パンを買いに行くことはしごとではありませんでした。それはシモンがよろこんでするほうでした。というのはかれは家族をあいつでいたからなのです。

とつぜんシモンはまゆをひそめました。かれのまっすぐ前に2人のローマのえい兵が話をしながらたてものかげに立っていたからです。シモンはまだとても小さかったので、ローマ人たちがさいしょにパレスチナにやってきたときをおぼえていませんでした。けれどもかれのおとうさんは、ローマ人たちがどのように神殿やユダヤ教会をはかいしたか、またいかにかれらのゆくてをばばもうとした人々を殺したかを話してくれていました。今ローマ人はこのパレスチナをしはいしており、ユダヤ人たちは高いぜいきんをかせられているのでした。かれらの間にあいがみられないのもふしぎではありません。

彼はえい兵たちのところを通るとき足を早めました。しかしかれらは2人とも話に夢中でシモンには注意を払いませんでした。

市場はいつもよりこんでいました。シモンがパン屋の店さきまで進んでいくのも大変なほどでした。

「きょうはなぜこんなに多くの人がいるの」とかれはパンのお金を払いながら、パン屋の人にたずねました。

「エジプトから2つの隊商がゆうべやってきたんだよ。そこでみんなかれらのもってきたものを見に来たんだよ」とその人は答えました。

シモンもそれを見たいと思いました。でもかれは、おかあさんが夕食のためのパンを待っていることを知っていました。市場をよこぎる時にかれは、早く行くことができるようにぐんしゅうのはじの方に出ました。そうして家に通じている通りに出たとき、道のまんなかに立って泣いている小さな男の子を見つけました。

シモンはえい兵たちのところを通り過ぎたときのように顔をしかめました。というのは、そのこどもはユダヤ人ではなくローマ人だったからです。しかしかれはその男の子がかわ

いそうになりました。ぐんしゅうはそのこどもをあらあらしく横においやりました。道を通る人はだれもそのこどもにちゅういを向けないか、ただ顔をしかめて通りすぎて行くかのどちらかでした。

シモンはためらいました。この少年はローマ人なんだと思いました。なぜぼくはあの少年を助けなければならないのだろう。その上もしぼくがここで立ち止まれば家に着くのがおそくなり、おかあさんをしんばいさせるとも思いました。しかしシモンが立ち去ろうとしたとき、イエスのことばが彼をひきもどしました。イエスは人々にたがいにあいしあいなさいと言っただけでなく、あなたの敵をもあいしなさいと言われたのです。

シモンはもどっていき、群衆をおし分けてその男の子のところに行きました。「道にまよったの。」と彼はたずねました。その少年はうなずきました。「どこに住んでいるのか言ってごらん。ぼくがそこまでつれて行ってあげるから」そのこどもは泣きながら話したので、シモンはやっと柱のある大きい白い家のことについて言っていることがわかりました。



少年の手を引いて、彼は町の真中にもどってきました。「しんばいしなくていいよ。ぼくが家までつれて行ってあげるから」

彼はおそろしくなりました。というのはこの少年の言っている家はローマ総督（そうとく）の宮殿にちがいがなかったからです。

そこに行くことはできないとかれは思いました。しかしなきじゃくっているこどもを見たら行かなければならないと思いました。少年の手を引いて、彼は町のまんなかにもどってきました。「しんぱいしなくていいよ、ぼくが家までつれて行ってあげるから」とかれは少年に言いました。

しかしシモンは宮殿のまわりをけいびしているえい兵たちを見たときゆうきをなくしてしまいました。そのこどもの手をいっそうかたくにぎりしめて、入口の石段をのぼって行きました。

とつぜんかれはよろこびの声を聞きました。「ぼうや、ここにいたのね」少したってからドアがぱっと開いて、こん色の服を着た女の人が石段をかけおりてシモンたちの方にやっ



てきました。

少年は「おかあさま」とさけぶとシモンの手をふりはなしました。シモンはびっくりして石段をかけおりました。というのは、その女の人は長い服を着た背の高い男の人に後を追いかけてきたからなのです。何人かのえい兵はこのさわざに近寄ってきました。

「待ちなさい」

シモンはふり向きしました。彼を呼んだのは背の高い人でした。

「もどってきなさい」その声は重々しく、シモンはしかたなしにその声にしたがいました。

「私は息子をここにつれて来てくれたことをかんしゃしたい、われわれはえい兵たちに午後ずっとさがさせていたのです。どこでこの子を見つけたのかね」とその人は言いました。シモンは総督みずからが質問しているのだということを知っていました。

シモンは市場から帰るとちゅうこの子を見つけたことを力づよく話しました。総督はこまったようすで言いました。

「しかし君はユダヤ人だね、なぜローマ人を助けるためにもどって来てくれたのかね」

シモンはほほえんでいました。「私たちの主はだれをもあいし、助けあうべきであると教えられました。」

ローマの総督はほほえみかえして「きみたちの主はすばらしい人にちがいない」と言いました。

「そうですとも。とてもすばらしい人です」とシモンはすなおに答えました。

シモンはびっくりして石段をかけおりました。というのは、その女の人は長い服を着た背の高い男の人に後を追いかけてきたからなのです。「待ちなさい」とその人は言いました。



決心——なぜ今することが大切なのか

十二使徒評議員会会長代理
スペンサー・W・キンボール

若い人々は代価を払って報いを得なければならないことをすぐに学ぶ。彼らはよくできるようになるにはよく練習しなければならないことを知っている。私には高校でレスリングをしている数人の孫がある。10代の食欲旺盛な時期にあるにもかかわらず、彼らは自分の重量制限を守るために、毎週食事や水さえもとらないことがある。彼らはしばしばからだ痛み、のどが焼けそうになるまで練習を続けるのである。彼らは自分で最善を尽くしたいと思うからこそが頑張ってこれらの試練に耐えているのである。

私は伝道を終えて帰って来てから大学に入りたいと思ったが、家族は私を学校に送るほど余裕がなかった。そこで私は学費をかせぐためにロスアンゼルス南太平洋鉄道の積み荷の仕事についた。

私は手押し二輪車に積み荷をのせ倉庫と貨物列車の間を往復しながら1日14時間も働いた。千ポンドの荷物をその手押車に乗せて運ぶこともしばしばであった。1日の終わりに私がなぜそれほど疲れたのかおわかり頂けると思う。

私は仕事場から2、3マイル離れたところに妹と一緒に住んでいた。電車

賃は10セントだったが、私は1日20セントを節約するために毎日往復の道を歩いたのである。私はなんとしてでも大学に行きたいと思った。そうして往復の道を歩くことによって、私の目標はほとんど実現していった。こうして私はアリゾナ州の家に帰りアリゾナ大学へ入るだけの十分なお金をためたのである。

各個人に与えられている根本的な仕事の1つは決心することである。1日に何回となく私達は道の分岐点に立たされて、どちらに行くかを決めなければならない。ある道は長くけわしいかもしれないが、私達を最終的な目標に向けて正しい方向に導くものである。一方短かく広く快適な道であっても、間違った方向に行くものもある。道の各分岐点でどちらがより容易で快適か、あるいはみんなの行く道はどっちかなどという見当違いの問題で迷わないために、私達は心の中に最終的な目標をはっきり持つことが大切である。私達が心にはっきりした最終的な目標を持ちつつ前もって決定しているならば、正しい決断をすることは最も簡単なことであり、私達を疲れさせ、心を悩ませる、別れ道における多くの迷いは取り除かれる。私は、若い時に決して、

お茶、コーヒー、タバコ、酒を飲まない決心した。様々な経験を通して、この固い決心は私を何回となく助けてくれたように思われる。ちょっと一口飲んだり、試飲しようと思えばできる場合が多くあったが、この固い決心が私に抵抗する理由と力を与えてくれたのである。

伝道にでるかスポーツ奨学生になるかを選択するずっと以前に伝道にでる決心をする時期がある。目的が違っているボーイフレンドやガールフレンドを好きになるずっと以前に神殿結婚を決意する時期がある。あなたが店員から余分のおつりを受け取る以前にいつも正直であろうと決心する時期がある。大好きな友人があなたをこわがっているとか信心深いふりをしているなどと言ってせめられる以前に麻薬を飲まない決心する時期がある。私達が天父で居る神と共に永遠に生活する機会のためにあらゆることをしようと決心する時期は今である。私達のするあらゆる選択は、最終的な目標への到達を何事にも妨害させないという強い決意に従ってなされるべきである。

人々の中には私達自身が決定を下すのではなく、風や波の思い通りに動く舵のない船のように、選択権を持たず

に単に環境に答えているだけだと思っている人がある。私はもはや目標を達成させることができなくなる時も来るとは思うが、しかしそれは私達自身の過去の決心の積み重ねが私達を無力なままにしているということが判明した後のことであると思うのである。

初めに私達1人1人は多くの可能性を秘めており、私達が何を選ぶかによってそれらを開発していくことができる。若人には、まだ大きな可能性が残されているのである。私達はなりたいたものを選ぶことができる。年がたつにつれて私達の過去の選択はまだ私達の前に開かれている選択の門をせばめていき、そして私達は自分の将来をほと

んど制御できないようになるのである。環境の重要性を否定する者はいないが、しかし、最終的に見て最も大切なことは私達がどのように周囲の状況に対処するかということである。私は普通の人であればみな可能性を有しており、どのような環境のもとにあるとも神の助けでいかなるチャレンジにも立ち向かうことができると信じている。神は決して私達を助けないで放っておかれることはないという慰めの聖句がある。

「神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるようにのがれる道も備えて

下さるのである。」(Iコリント 10:13)

私は貧困が人々の中に全く違った結果をもたらしているのを見てきた。ある人にとって貧困は辛く、そのため自己をあわれみ、簡単にあきらめて未来を放棄してしまうのである。しかし他の人々はそれに挑戦し、障害を越えて成功しようと決意し、その結果有能な力強い人々となるのである。そういう人々はたとえ経済的には楽になれないとしても、キリストのようになるに必要な内なる資質を成長させているのである。

やるとやらないの間に

リチャード・L・エバンズ

優柔不断の苦悩を暗示したシェイクスピアの言葉がある。「おれは、やるとやらないの間に今戦争中だ。」¹ 独断的な人々は絶対的に正しいか絶対的に間違っているかどちらかである。だが優柔不断の人々は「やるとやらないの間に」苦悩し、挫折し、打ち負かされることが多い。学生は専攻を変更すればかなりの時間がむだになることを知っている。だが自分に合わない専攻を続けるよりは、方向を変える方がよい。しかしながら、確信を持たずに出発し、何度も立ち止まれば、相対的にみて全く進歩していないことになりかねない。人生において欠かすことのできないものの1つは、何を決定するかを決めることである。そして、人は自分自身で決定を下すまでは真に自分自身の権利に到達したとは言えない。意地をはらず、勧告を受け事実を直視し、よく考え、祈った時に、我々に決定を下すべき時が訪れるにちがいない。原則の決定は見た目よりも簡単でなければならない。盗みをしないこと、正直であること、清いこと、これらを決定するのに長い時間をかけてはならない。正邪に関する事柄に優柔不断であってはならない。同時に我々は、次元の低いつまらない事柄に対して時間をむだに費すべきではない。よく知られたことわざがある。「行なわぬことは無への道。」² 何者かになるために、我々は何かをしなければならぬ。何かをするためには決定を下さなければならないのである。結婚の時、我々は正直、忠実、そして誠実な生活をし、つれあいを愛し、幸福な家庭を築くことを決意するはずである。我々は、かわした誓約や契約を守ることを決意するはずである。我々は、期限が来た時には負債を支払うことを決意するはずである。我々は、病気の症状が継続する時は医師の診察を受けようと決意するはずである。我々は、十分な教育を受け、途中で脱落せずに卒業の資格を得よう、正直に熱心に学ぶことを決意するはずである。我々は独立心があり、生産的で頼りになり、清く、身なりの整った丁寧な人間となることを決意するはずである。もしだれかが積極的な立場に立ち、何かを行なうことを決意しなかったならば、多くの価値ある事柄はなされなかったであろう。我々はよく考え、よく祈り、有益で幸福な人生を送ることを決意し、「やるとやらないの間に」自らを見失わないようにすべきである。

1. ウィリアム・シェイクスピア「只には只を」第2幕第2場
2. ナサニエル・ハウ「ことわざの話」(A Chapter of Proverbs)

4つのエベレスト

ビクター・B・クライン博士



ギリシャ神話の有名な英雄ヘラクレスは、アルゴスの王の息子エウリュステウスに12の不可能な仕事をするように命じられた。その仕事というのは、オーシアスの牛舎を1日できれいにすること、マイノスのどうもうな雄牛をつかまえること、9つの頭をもつ毒蛇ヒドラを退治することなどであった。これらを成し遂げた時の最終的な報いは不死不滅となり神々と共に住めることであった。歴史家によるとヘラクレスは恐らく実在した人物で、ミケーネ時代のティリュンスの頭でありアルゴス王に仕えていたと考えられている。実話か架空かわからないような彼の行為は、歴史外典に詳細に記されている事柄以上のある心理的な真理を教えているのである。

これは偉大な克己力と想像力、勇気をもって信じがたいほどに困難な厳しい仕事を成し遂げ、その結果ギリシャ語でいう日の栄の王国に到達した人の物語である。どの時代にあって、ひとりびとりの勇気がためされねばならない特別な仕事、あるいは試練があるように思われる。そして私達の時代には、あ

る意味でヘラクレスの命じられたこと以上のものが要求されているのである。ためしの内容は異なっても、チャレンジと困難は変わらずに残っているのである。ユタ大学のカウンセリングセンターで7年程働き、若人を個人的にまたあらゆる学級や組織の中で援助してきた後で、私は末日聖徒の若人は、ヘラクレス同等のためしに直面しているとわかったのである。これら4つのためしは、肉体的なものではない。それは肉体的な勇敢さや力強さを必要とするのではなく、むしろ心理的あるいは道徳的なためしやチャレンジの分野にあるのである。しかし、ある意味においてそれは神話のヘラクレスが直面した以上の困難を与えているのである。末日聖徒の若人の直面している4つのためしは4つのエベレスト山に登ることにたとえられるだろう。ある時には、ほとんど登るのが不可能なように見える。しかしもしそれを達成すれば報いは大きく、その経験は実に貴重である。そしてこれらの高い山に登った人々がいるということで、私達にもできると思うのであ

る。

人生の初期にすべての人々が公平に直面するためしは、権威との闘いである。私達はそれを「権威闘争」と呼んでいる。私達は他人によって定められた規則に従いたくないのである。つまり、ああしろこうしろと指図されたがらないのである。私達は自分自身の道を求めたがっている。しかしながら社会が存続するためには、お互いの安全と利益のために他人と同意することが必要となってくる。多くの若い人々は強く自由と独立を望み、彼らは法に縛られていないと感じ、またそう望んでいる。彼らは抑制されることにがまんができないのである。権威との最初の闘争は、いわゆる家族の代表者である

<著者説明>

ビクター・B・クライン博士はユタ大学の心理学教授であり、人間の個性や精神衛生の分野での研究者として豊かな経験の持主である。彼は多くの専門分野に名をあげており、現在、青少年保護委員会の一員である。彼と夫人との間には8人の子供がある。

両親との間に起こる。家族は社会の縮図であるから、多くの長期にわたる世代間の争いが起こるのは、この家庭である。そしてあらゆる世代の人々が同じ闘争や衝突を経験しているのである。

ある朝、私は1人の若い末日聖徒の大学生と面接をした。1時間のうちに、彼はタバコを1箱半ものんだのである。彼は1本のタバコをほんの少しだけ吸うとそれを棄てて、そわそわしながらまた次のタバコを取りだした。彼の顔にはタバコを吸うのを不快に思っている様子がありありとうかがえたので、私は彼にタバコがおいしいかどうか尋ねた。彼の答えはこうであった。「いいえ、とんでもない。」そこで私はタバコがきらいなのになぜいつも吸っているのかと尋ねた。彼は困った顔をしてわからないと答えた。飲み物について尋ねた時に、彼は相当量の酒を飲むと言った。しかしまたもや彼はあまり酒が好きでないといい、なぜ飲んでいるかわからないと答えた。彼は教会やその考え方や教えに魅力を感じながらも宗教的な行事には出席していなかった。彼はなぜ出席しないのか自分でもわからなかった。

彼の背景を調べてみると、彼は非常に信心の厚いかなり厳格な父親と対立し、閉ざされているのがわかった。効果的な意志の疎通や理解は全くなかったのである。ほとんど無意識のうちにこの若者が父親に対して使っていた策略は、彼らの共通の宗教の規則と禁止事項をことごとく破ることであった。彼はそれが父親を傷つけ、父親の支配から独立し自由であることを示す最も良い方法であると思ったのである。この若者は父親や彼の示す権威に立ち

向かえなくなり、非常に失望し、彼がまだ価値あるものと考えていた霊的な宗教的な絆からさえも切り離されたのである。彼は忠誠と感情が合争っている迷路に入り込んでしまい、動きが取れなくなっているのである。

非常に太った若い既婚の婦人が夫に反抗していた。彼女自身も自分の非常に太ったみにくい状態にいやがしていた。彼女は体重を減らすために助けを求めたが、いろいろ多くの美容食に関するアドバイスが与えられたにもかかわらず、何かはっきりしない理由から彼女はそれらのアドバイスに従わなかった。彼女は自分自身が魅力的になるのに必要なそれらのことをすることができないように思えた。彼女の夫がいつも彼女の重すぎる体重に不満を述べ、しばしば食べ物を制限するように忠告を与えるということを彼女の口から聞いた時、そのジレンマに対する答えが浮かんできたのである。夫に対する反抗心の現われとして、彼女は何気なくこうつぶやいた。「夫のために体重を減らすなんて全くばかげているわ」このように、夫への悪意から、自分にとってまったく否定的な結果を生むにもかかわらず、彼女は自分自身を常に魅力的でない状態にし続けたのである。

「とげあるむちを蹴る」とはこの種の権威争いのもたらす一般的な結果である。権威にだめだと言われたり、権威を両親に承認されない行ないがあると、その人自身は欲求不満の怒りを感じ、その結果害をこうむるのである。この問題をかくも困難なものにしているのは、時々抑制されている側が正しいからである。機会を拒む人、たとえば車を取り去る父親は、その状態のも

う一方の側を完全に理解してはいないのである。誤解されている側の人は、相違を巧みに切抜け相いれる技術同様、機転と忍耐が必要なのである。ある若い人々は権威問題を解決する方法を知っているが、中には全然知らない人もいる。彼らは冷淡野蛮で、いつも腹を立て欲求不満となり、自分達の宗教や神、配偶者や彼らが働いている人々に対して、時には自分自身に対してまでも反抗し続けるのである。このように多くの人々の心の中は分裂している。そのような人々は本当に不幸な人々である。

多くの若い人々が直面している2番目の大きなためしは、自分自身の憶測で自信を持ってないとか、自分自身を尊ぶことができないと思うことである。数年前のユタ大学の調査で、次のような質問がなされた。「あなたは劣等感を持っていると思いますか。」93%が「はい」と答え、多くの人々がこの問題と戦っていることを明示したのである。



著者はかつて18歳か19歳位のとても魅力的な末日聖徒の少女と面接した。彼女はずっと年上の男性と長い間交際を続けていた。彼には前科があり、アルコール中毒者で女性に対しては無礼に振舞い、性格は粗野で下品で性病に悩まされていた。彼女の女友達や家族は彼女がこのような男性とデートしていることを知って驚き、彼女にカウンセラーと相談するようにと提案したのであった。「彼を愛していますか」と尋ねられて彼女はすぐさま答えた。

「いいえ、全然。」

「ではあなたは彼に好意を持っているのですか。」彼女は答えた、「いいえ、私は彼がこわいんです。」「なぜ彼とデートを続けていきたいのか」と尋ねられて、彼女は弱々しいほとんど聞こえない声で答えた。「でも、他にだれが私とデートしてくれるでしょう」

彼女の自分自身に対する評価はあまりに低く、自分はそれ以上のものを受け取るに値しないと感じていたのである。もしもあなたが自分自身を「つまらない者」と思うならば、あなたは、「つまらない者」と知りあいデートすることになるだろう。そして結局はだれか「つまらない者」と結婚をし、しばしばあなた自身にとってもまた子供たちにとっても悲惨な結果を招くのである。

私達の自己評価は、決定をしたり、しようとする時に選んだりする時、また誘惑に抵抗しようとする時に大きな役割を果たす。若い人々が麻薬やアルコールなど、からだをむしばむものにふける1つの大きな理由は、彼らが所属するグループの影響を無視できないためだとある調査の結果は示している。

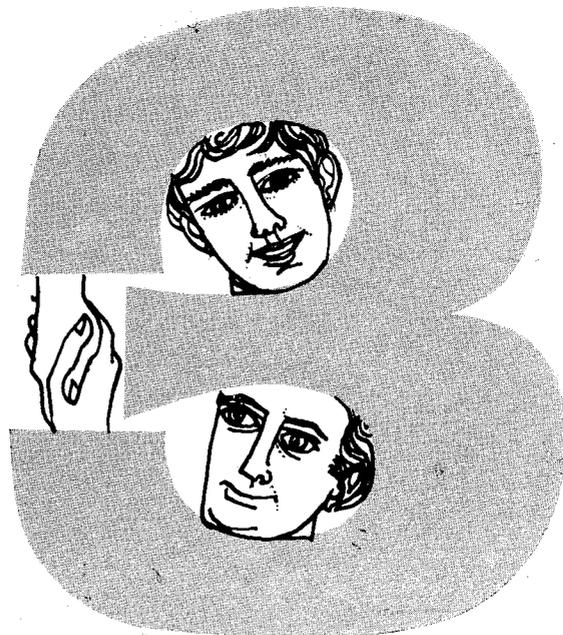
ある十代の末日聖徒の少年は、麻薬の使用を次のように言って正当化している。「でも、薬を飲むのが悪いなどと知恵の言葉にはないですよ」すこしたってから彼はアルコール飲料もしばしば口にしていたことを告白し、彼はそれを正当化するためにやはり他の口実を使った。

私達はそれがどんなに反社会的であり自分の害になろうとも、つねに正当化する口実を見つけるものである。麻薬やヒッピーの生活に入った多くの若者は自分を見失い、そのグループの人々が彼らをありのままに受け入れてくれることに満足するのである。そこには批判も罰則も何もなく、髪はのび放題にし、衣服はきたなく、体は不潔でにおいがしても気にすることはないのである。彼らの行動、セックス、麻薬に対して何ら批判はなされず、彼らは全くの解放感を味わっているのである。彼らは彼ら自身が反体制であることやすべてのしきたりやキリスト教倫理の道徳を棄ててしまったことを喜んでいるのである。ただし、彼らが選んだこの新しい生活は、彼らが後に残してきた生活よりも与えるものがはるかに少ないということに彼らは気づいていないのである。忠誠、愛、犠牲、義務、慈善、他の人のために耐えることなどはすべて麻薬の世界にはない特質である。そこは末梢神経と精魂への刺激を最高の喜びとし、自分の必要のために他人を利用するのがあたりまえの世界なのである。それは拘束的な生活であって、自由はないのである。彼らの考える自由はただの錯覚でしかない。

残念ながら自信に欠けている自分自身を愛し尊ばない人々は、おうおうにし無批判、わがままな甘言、安易な道

新しい生活という約束をかかっている人々の誘惑に応じやすいのである。しかしそれはわなである。そのような人々の治療にあっている医者ならだれもが知っているように、それは多くの人にとって霊の死を、また若干の人々にとっては肉体の死をもたらすのである。

第3番目の大きなためし、あるいはチャレンジは、他の人々と「交わる」方法を学ばねばならないことである。これには両親とか兄弟姉妹、結婚する相手、共に働く人々、目上の人、私達の管理する人々、同じ地域の人々、私達の属している社交グループの人々などが含まれる。他の人々とどのように交わるかを知ることは、私達に与えられていることで最も大切なことかもしれない。これはどのように愛するか、またどのようにすればみんなに愛されるかということをも含んでいるのである。もし私達がこれを効果的にする方法を知るなら、私達は幾多の社会的なそして感情的な必要を満たすことになるだろう。もし私達が他人との交わり



るかということをも含んでいるのである。もし私達がこれを効果的にする方法を知るなら、私達は幾多の社会的なそして感情的な必要を満たすことになるだろう。もし私達が他人との交わり

に失敗するならば、私達の社会的、感情的、靈的な進歩は妨げられるだろう。

最近、5年前に夫を亡くしたある1人の婦人の葬式が行なわれた。その婦人をたたえる美しい感動的な話がされた時、彼女の7人の子供たちは一緒に泣いた。2日後に、空家になった彼女の家に子供たちが集まり、彼女の遺産をどう分配するかを話し合った。2人の娘がおそらく10ドル位と思われるすりきれたソファをだれがもらうかで議論を始めた。お互いの侮辱は遂にはけんかにまでなった。母親の遺産の分割は、子供達として過去に彼らが経験することのなかった争いをひき起こしたのである。

またある婦人は、彼女と接するすべての人々を元気づけるのである。彼女は人々の人格を高め、最善を尽くさせ才能を発揮させる特別な賜物を持っていて、だれもが満たされ、報われた気持で彼女のもとを去るのである。言う

までもなく彼女は多くの友人があり、また多くの人々に愛されている。彼女は人々と交わることに特別な才能を伸ばしたのである。

最後の仕事またはためしは、人間の欲望を抑えることである。時々心理学者達は、本能あるいは私達の衝動的な分別のない性質を引きあいに出している。あらゆる人は内部のこの「虎」を静めるために戦っているのである。それは性欲とか侵略、貪欲などのような人間の根本的な本能と肉欲から生じる激情と欲望をも含んでいる。それにはまたアルコールとか麻薬も含まれるのである。もしもこれらの激情が鎮められて抑制されるならば、人の理性ある靈的な性格(自我)がその人の行ないを決めることができるのである。反対にもし激情がその人を支配するならば、人は破滅し、家族間のつながり、あるいはその人の将来の大望は破壊されてしまうであろう。そして彼の生涯は全くだめになってしまうのである。

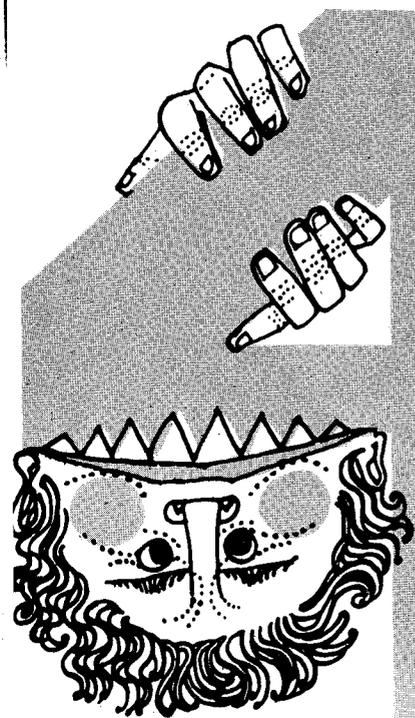
これは例外なくすべての人に課せられている永遠の戦いである。たとえば私の知っているある20歳の少年はヘロイン常用者となり、遅すぎたのではあるが、涙を流しながら自分は自由意志を失ってしまったと嘆いたのである。彼は薬がうまいと感じるのではなくただひどい苦痛を除くために常用したのであるが、それはまた別の苦しみを生んだのである。

性欲はふさわしい場にあっては健全

なものであり、良き結婚のきずなではあるが、もし卑しくされ誤用されるならば、人を破壊し腐敗させる可能性がある。侵略、怒り、敵意などもまた人を破壊するものであり、一瞬のうちに人生の大望を打ち砕くものである。しかしもしそれらが適切に他の方向に向けられるならば、勝負を争うスポーツや事業、ユーモア、あるいは芸術や音楽にまで及ぶのである。

もし私達が私達の仕事をなし遂げようとするれば、すなわち4つのエベレストに登らねばならないとすれば、「そこにあるから」すなわちチャレンジがあるからというだけでなく、それ以上の理由がなければならぬ。長年にわたって目先の満足を求めそれらに動かされている人は、後で神聖な理由を知りたいと思うようになるのである。最終的な目標、目的がなければならぬ。私はその目標とは、いつの日か来世で、愛と慈悲が広まる時に、義人の社会に住む望みであると信じている。たぶん私達はそこで、世にある悪のために生活が閉ざされ、暗黒の君に誤まり導かれてつまづいている人々を助けることができるかもしれないのである。

私達が1人だけであつたら天国は楽しいところではないと私は思う。私達がこの地上で進歩できるのは、信仰と愛同様に強さ、勇気、克己を通してである。また同じような喜びを経験するように、力の足りない人、心の弱くなっている人、悲しんでいる人、慰めと希望を必要としている人々を祝福する能力をもこの地上で見出すことができるのである。私達はこの世にあつてもまた来世でも私達の兄弟の番人なのである。



目と目のふれあい

デラ・メイ・ラスムーゼン



男の人でも女の人でも、あるいは子供にでも十代の若者にでも尋ねて下さい。テキストを見ないで教える教師に好感を持つという答えが100パーセントを占めることでしょう。教師が大部分の時間をテキストに目を向けてレッスンするのでなく、クラスの生徒たちとの目と目のふれあいで進めるという、そのような方法の絶対的な価値は成長と福音を教える上での効果との点からは測りたいものです。

あなたが非常に楽しくつどってきたクラスの教師とは、おそらくテキストをクラスの前で目に見えるようにしては使わない人

主婦であり母親であるラスムーゼン姉妹は、神権教師養成委員会の委員であり、初等協会中央管理会会員である。彼女は1968年ブリガム・ヤング大学で教育心理学の博士号を受けた。現在彼女は家族と共に、プロボのシャロン東ズテーキ部プリーザント・ビュー第二ワード部に所属している。

々でしょう。このような教師が個人的な思いやりや熱意、ほかでは得られない主題の把握力を持っていることはすぐにわかります。

テキストを持ってレッスンを行なう教師にクラスの生徒がどんな反応を示すかについて注目すべき事実があります。

ある神権者は、彼の教師について次のように語りました。「彼は私のよい友だちですし、模範となる人です。彼は長い間神権定員会とグループで教えてきました。しかし私は、彼が本当によく準備してレッスンに臨んだらよいのにとっています。私は彼が開いたテキストを手に見ているのを見ると、彼がレッスンをもっと興味あるものにしようという関心をもっていないのではないかといぶかしく思います。」

ある扶助協会の姉妹はこのように言っています。「私たちのクラスの教師は、レッスンの時間中ほとんどテキストばかり読んでいます。そして彼女はそのことを『私が

それを話すよりも著者が述べていることの方がもっとわかりやすいでしょう』と言いつけするのです。」神は暖かい人間味ある声と親しげなまなざしをした教師を備えられました。そして人が、物言わぬ印刷物を作り出したのです。

ある15歳の少年は次のように述べています。「ぼくは日曜学校のクラスには出席しません。開会行事のあと帰ります。だってレッスンから学ぶことがなにもないんだもの。ぼくたちの先生は顔の前にテキストをおいて、まるでぼくたちに質問されるのを恐れているみたいなんです。」

ある7歳の子供はこう言っています。「私は先生が本を読んでいる時静かにするようにしているの。でも、ほかの子はそうしないの。すると先生はその子たちをホールに出してしまうのよ。」

このような批判は幾度も繰返されてきました。教会のクラスに出席する人たちは、教師との目と目のふれあいを望んでおり、

期待しているのです。

目と目のふれあいで教える準備をするために、教師は概念と福音の原則が一致し、また相互に関係し合っているのはどこかをよく祈り、よく考えてテキストを勉強しなければなりません。しかし、教師はクラスで教える始める時には、目と目のふれあいで概念を伝えるべきです。このことはレッスンにあまり関係のない個人的な経験を話し合うという意味ではなく、そのレッスン教材を教えるために教師が自分自身を備えることを意味しています。

今は、人と人の意志の疎通について関心の持たれている時代です。十分に準備し、教室でテキストに頼らない教師は、どんなメッセージをクラスの生徒たちに伝えることができるでしょうか。そのような教師は生徒に次のような印象を与えます。

よく準備している。

自信がある。

生徒の意見を聞く用意ができています。

生徒に関心を持っている。

教材に熟知している。

生徒と一緒に学びたいと思っている。

喜んで生徒の手助けをしたいと思っている。

福音を教えることに献身している。

毎日の生活の中で、ほとんどの人々が友達やその他交際している人々と直接に目と目のふれあいを持っています。目と目のふれあいによって彼らは、自分たちの存在を認める他人がいることを、そしてその人々が彼ら自身に、また彼らの感情や意見に関心を持っていてくれるのだということを確認するのです。

教室以外のところでもまた同じように目と目で教えることは大切です。多くの両親たちは、家庭の夕べを行なう際に、テキストに全く頼ってすぐそれを持ち出し、文字通りにそれに従うことは最も効果の薄い方法だということに気づいています。十分な準備をした上で、目と目のふれあいで意志の疎通を図ることが絶対に必要なのです。

この目と目で教えるという考え方は目新しいものではありません。救い主はこのような方法、すなわち、弟子たちをそばに引き寄せて、目と目でまた心と心で話され、

教えられました。この神権時代の1902年頃にも、教会の教師たちは生徒に手を伸ばし教えることができるように、テキストをみないでレッスンを行なうよう忠告が与えられました。(チルドレンズ・フレンド 第1巻, P.188)

何千人もの献身的な教師たちが目と目で教える方法を用いています。これらの教師たちは、そのことについて何と言っているのでしょうか。

ある教師は次のように書いています。

「私は、ずっと以前から目と目を合わせて教えたいと思っていました。私がおの方法を用いて以来、私のクラスの生徒は私が受けていると同じくらい恵みを受けています。私はきょう、ひとりの少女から、レッスンがとても楽しかったのでこの次には彼女の親友も連れてくるという言葉聞いた時、本当に、報われたような気がしました。」

また、他の教師は次のように言っています。「私はもっと創造的で、もっとよく準備する時間を持つべきだということがわかりました。終りのベルが鳴って、最も扱いにくい子供のひとりが、『家へ帰るベルが鳴らないといいのに。きょうはレッスンの終るのがはやすぎるよ』と言った時、私は本当に報われたと感じました。」

あるアロン神権の教師は次のように語りました。「それを実行することは、私が思っていたほどむずかしくはありませんでした。少年たちは注意を払い、レッスンに引き込まれるようになったのです。以前、私は非常に神経質だったので、安心感を得るためにテキストに頼っていたのだと思います。」

目と目で教えることは、すべての年代、すべてのグループに必要なとされています。多くのおとなはよく聞いてくれるし、退屈な教師のクラスにも毎週来てくれるかもしれませんが、彼らがレッスンに引き込まれる時、もっとそれ以上の何かを得るようになるでしょう。

目と目で教える方法が明らかに益があるにもかかわらず、教師の中にはまだ反対している人々もいます。ある教師は、自分はまだ十分によい教師であると思っているし

そのようなチャレンジによって自分の自由意志が取り去られるような気がすると言っています。

また他の教師は、クラスにテキストを持って来る代わりに、ノートをとるなど時間の浪費であると考えています。しかしながら、彼女は話し手が考えを順次思い起こす手だてとしてノートを用いることは、より効果的であるということには同意しているのです。

目と目で教える方法に反対している多くの教師たちは、それを決してやってみようとはせず、それは効果的ではないとか、いつもの自分たちの方法より良いものではないときめつけています。ある者はそれをいやいやながら試みるかもしれません。そしてそれが失敗した時、やはり自分たちの思っていたことが正しかったのだと喜びを感じるのである。

教師が奇妙な声や印象的な方法でテキストを読んでクラスの注意をひきとめてレッスンの全部か、ほとんどを行なうことができるというのはごくまれです。しかしながら、教師は自分がそれらのすぐれた特性を持った人間であると考える前に、テキストを手にして行なっている自分のレッスンに対して正当な評価を受けるために匿名のアンケート用紙を自分のクラスにあえて配る意志があるかどうかを自分自身に問うてみて下さい。

テキストを読むのが良いときもあります。それは、聖典の参照すべき箇所や引用するのが特別に効果的な短い挿話や抜粋の場合です。しかし、教師は全部のレッスンをこのような方法で教えることができるという安易な考え方に注意すべきです。

どのようにしたら目と目で教え始められるでしょうか。教師が古い楽な習慣を捨てることです。しかしそれも非常に努力を要します。テキストを持たないで教えるためには努力が要求され、もっと多くの勉強と準備が要求されます。しかし、福音をもっと効果的に教えることによって、主に仕えるなら、心に平安と満足がもたらされることでしょう。

よきおとずれは響かん (小説)

アイリス・シンダーガード

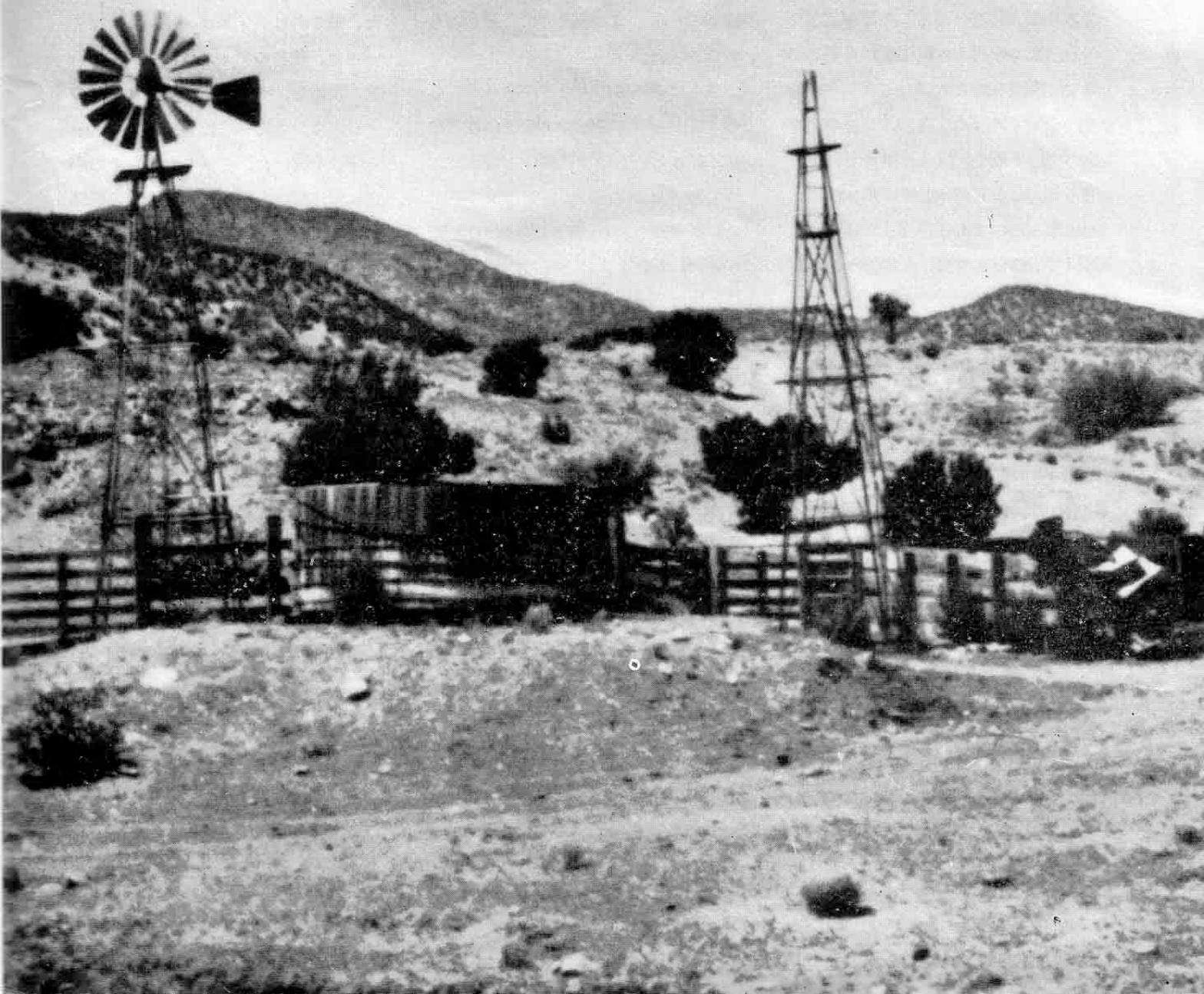
<著者説明>

シンダーガード姉妹は雑誌「オグデン標準試験官」や「フレンド」への常時特約寄稿家である。活発な教会の会員であり、ケイビル第3ワード部のプライマリーの第一副会長でありマックス・シンダーガード氏の妻である。

カール・イーストンの車が山の背に止まった時、たくさんの思い出が彼の心をよぎった。彼の真下には谷があり、そこをうねった川が流れ、ぼんやりとしたその青い川のむこうには山があり、そのふもとに村があっ

た。

「さあ縦横無尽に働いてやるぞ。」カールは思いにふけた。彼は谷に続くうねった道を下りながら、始めて伝道の召しを受け、彼が19年間過ごした場所からあまり離れていないニューメ



キシコで2年間働くことになったのを知った時に、どんなに失望したかを思い出した。彼は本当にがっかりしたのであった。伝道の召しを心待ちにしなから、彼は赤道下の遠く離れた美しい地や、先祖の地であるヨーロッパの国々、そして異国風な南アメリカの地を歩いているのを想像し、夢見ていたのである。しかし彼は近くの州へ行くことになったのである。カールは喜びの気持でその召しを受け入れようとしたが、300人位の他の長老や姉妹たちと共に証会に出席し、大好きな讃美歌を歌うまで気持は晴れなかった。カールは1番の2節の歌詞が自分自身に直接訴えかけているように思った。

「山の上や荒れる 海を越えゆき
また戦の場にも 主は召したまわん
わが知らぬ道へと呼ぶ声小さくも
主により答えつつ

みむねのまま行かん

主よ、みむねのまま行かん

海、山、野を越え

主よ、みむねのまま言わん

みむねに添いまして

(末日聖徒讃美歌 100 番)

カールが謙遜な気持で宣教師の仕事始めるやいなや、彼はニューメキシコの地は彼が考えていたものとははる

かに異なり、岩肌がゴツゴツしている様子を除いては外国であるのを知った。人々の習慣や行ないは広い大洋を横切った他の国々と同様に目新しいものであった。

さらにその国の人々は、カールとそのメッセージが奇妙であるばかりでなく、好ましいものではないと考えたようであった。カールと同僚は憤りをかい、軽べつされた。戸はぴたりと閉ざされ、若い2人にとって、一番つらいことは、人々が彼ら自身やそのメッセージに対して少しの興味も示さないことであった。ゆっくりと一週間が過ぎ、やがて数か月が過ぎ去った。カールと彼の同僚たちは、伝えたいと心から望んでいた福音のメッセージを聞き入れようとする人を一度も見つけることができなかった。あと2か月たらずで解任というある日の午後、彼はガソリンスタンドへ行った。1人の男がきびきびした態度で窓を洗っている時にカールは疲れ切った声で尋ねた。「モルモンについて何か知っていますか」背の低い色黒のその男は笑顔を浮かべて答えた。「ほんの少しだけね。」カールは続けた。「もっと知りたいと思えますか。」その男は人の良さそうな様子でうなずきながら言った。「ええ、

ぜひと。」

カール・イーストン長老ははじめから明るい小さな男をすっかり好きになった。彼の名はディエゴ・サンチェズとあった。独身のディエゴは一人住まいで、乱雑な、それでいて清潔な感じのする家に長老たちを招き、喜んでメッセージを聞いた。しかしながらその小さな男は福音を受け入れた人々の標準がどのようなものかを言われた時に笑って言った。「そんなに多くのものを棄てられませんよ。」彼はしばしば手で示しながら言った。「パイプや酒、それはみな私の宗教です。」カールは再び彼にとって非常に意味深い讃美歌を思い出した。その一節はこうであった。

「主により語る時

愛を語り得ん

罪の道に

さまよう人を探し得ん」

カールは大きな忍耐をもって、ディエゴ・サンチェズが厳しい福音の標準に従うことはできないと言いはってもなおあきらめずに、彼の家を訪問し続けた。

カールは伝道の終わる一週間前に、ディエゴの生活をその時から全く変えてしまう、バプテスマを施すことができ

た。それは2年間の働きにおけるただ1つのバプテスマであった。

何年もカール・イーストンは過去を悲しい気持でふりかえり、伝道の仕事が不十分であったと感じた。確かにそれは失敗だったように思えた。

それから9年近くたってから彼は仕事のために、彼がかって2年間を費した地域を旅行することになった。彼はディエゴ・サンチェズに手紙を書くとすぐさま彼から愛に満ちた返事が返ってきた。ディエゴは、今や支部長であり、彼が訪問する日に聖餐会で話をしてくれるようにと頼んできた。

カールがその地域で働いていた頃にはその小さな町に支部はなかったのである。しかし彼は容易に支部の場所を見つけることができた。

彼はきたない綿の木が、車の駐車しているばら色のレンガの建物の方に並んでのびている通りを自動車を走らせた。彼が車のドアを閉めるやいなや陽気な叫び声が聞こえた。「長老、イーストン長老。」ディエゴ・サンチェズは急いで彼のところに走ってきた。

カールはディエゴがほとんど年をとっていないと感じた。いくらか黒い髪の毛が薄くなったことと腰のまわりがわずかに太ったことを除いて、彼は以前

と全く同じ、陽気なカールの友達ディエゴであった。カールは手をさしのべたが、ディエゴはそれを無視して両腕を彼のまわりにまわして叫んだ。「イーストン長老」そして背の高いカールの肩をたたきながら言った。「よく来てくれました。」恥らいもなく涙がディエゴの褐色のほほをぬらした。「こっちに来て下さい。会ってもらいたい人がたくさんいます。」

カールの腕を堅く握りしめ、胸をときめかせながらディエゴはカールを建物の階段のところ立っている人々のところへ連れていった。

「イーストン長老」ディエゴは顔を輝かせ、ほっそりしたとても美しい女性の手を引いて言った。「これは私の妻のジュアニタです。彼女は扶助協会の会長です。そしてこの人たちは……」彼はカールを前へ引っぱった、「私の両親のサンチェズ兄弟姉妹です。そして、私のいとこのペドロ、ガイ、ロメロ、彼らはみんな長老です。それに執事のエドワードです。こちらは私のおじとおばです。それから……」

カールは1人1人の歓迎の握手で圧倒された。ディエゴの顔は喜びのあまり光輝いているようであった。全員が教会の会員であると彼は言った。

カールはだんだんに、そこにいる人々はみなディエゴの親しい友人か親戚であることを知った。すべての人の紹介が終わると、やっとカールは尋ねることができた。「ディエゴ、この人たちはみなあなたのおかげで教会員になった人たちですか。」ディエゴは首を強く横にふって言った。「いいえ、イーストン長老、私のおかげではなくてあなたのおかげです。福音のメッセージをもたらしてくれたのはあなたです。私が拒否した時でもあきらめなかったのはあなたです。」

ディエゴはカールの腕を再び強くつかんで言った。「私はあなたが私にもたらしたメッセージをこれらの人たちに分け与えたのです。」

後でみんなの前に立ち、感謝と愛の気持ちに満ちている多くの人々の顔を見てみると、カールの目には涙が浮かんできた。伝道中にたった1人の改宗者しか出せなかったと思っていたのが、今では小さな教会堂を一杯にしているのである。のどにこみあげてくるものを押えて、カールは彼らに、大好きな讃美歌の最後の節を引用した。

「主に導かれなば、道はくらくとも
よきおとずれを響かせん

み心のままに」

日本伝道部

1971年8月1日

宇都宮支部の会員達にとっては、忘れ得ぬ日となったことでしょう。彼らは宇都宮伝道地が支部となる日を一年以上も待ち望んできました。伝道部長会及び地方部長会は宇都宮を訪れ、彼らの活動を見、支部になる日の事を考えてきました。

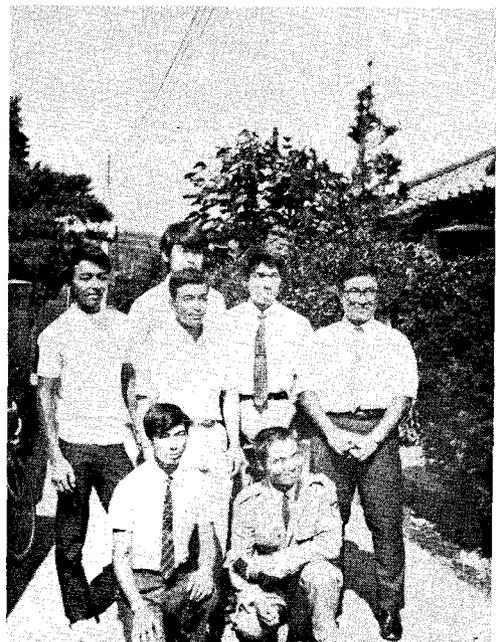
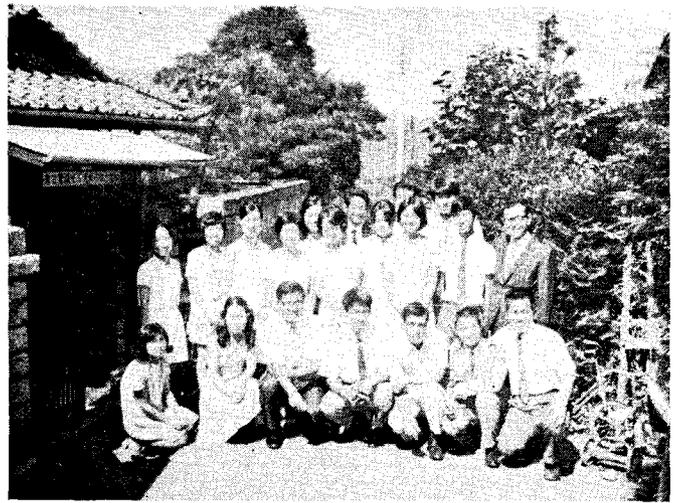
その日の朝は、メルケゼデク神権者達の面接がなされました。聖餐会が始まった時、各会員はそれぞれの場に席をしめ、各々の顔には教会の成長を反映するかのような輝きと支部になる緊張感に満ちていました。

新しい支部長会が支持された時、聖徒達の幾人かの目には涙が光っていました。証会では、会員達は支部になったことの祝福を感謝し、新しい支部長会を喜んで支持すること、また、栃木県に多くの支部やワード部ができる日を待ち望んでいることを証して下さいました。

支 部 長	中 田 嘉 之
第一副支部長	小 田 進
書 記 補 助	三 森 武 雄

扶助協会会長	田 中 早 苗
MIAYM会長	三 森 武 雄
MIAYW会長	大 貫 規 子

宇都宮の地、そこに住む人々の上に、そこに住むモルモン開拓者の上に主の豊かな御手がさしのべられ聖徒達の望みが成就する日が一日もはやくやってくるように、共にがんばろうという気持でいっぱいです。また、宇都宮に続く多くの新しく生まれる支部について、続々と御紹介できます事を期待します。



ステーキ部への第一歩



(近畿四国地方部大会で大神権の支持を受ける兄弟達)

7月1日より、日本中央伝道部に新しい歴史の一ページが開かれました。清水伝道部長が赴任されてすでに一か月、生後2か月の赤ちゃんと、活発な、2人の男の子をつれた伝道部長の一家にとって、7月1日から8月1日にかけての4週間つづきの地方部大会はとてもきついスケジュールでしたが、子供達は、とても可愛いく、会員達の人気の的でした。4回に亙る会員達の参加人員は1,207名を数え、29名の大神権者が誕生しました。

10年前に、西中央地方部長であった伝道部長は、阿倍野支部、岡町支部に集まった多くの会員達と始めて見る立派な建物を見て、神様の祝福の素晴しさ、福音の偉大さに感無量の面持ちで、この世に於ては、福音よりも大切なものは何一つない、この福音をすべての人々に伝えるのが、宣教師及び、会員の責任であると云われ、2年後にはこの大阪の地に必ずステーキ部があると信ずると力強く証をされました。こうして、この大阪の地にステーキ部を建設すべく、その第一歩をふみだしたのです。



(西宮支部ロードショウ)



(高知支部コーラス)

日本東伝道部

ユースコンファレンス

「あなたは何をしている時が一番楽しいですか？」と問う時、多くの若者はためらいます。しかし末日聖徒の若者達ははっきりと即答出来ます。

「沢山の人々が共に神の計画されたプログラムを遂行する時です」と。

【バレーボール】 電光掲示板を見守る選手も、応援団も一体となって白熱したゲームに参加しました。力強い若さをぶっつけ合う兄弟、姉妹達のスポーツマンシップとチームワーク。未来のモルモンを背負って立つ姿が感じとられるのです。

【ガーデンパーティ】 札幌支部への移動は貸切電車でやりました。貸切バスは知っていましたが、貸切電車は初めて。

涼風が運ぶ澄みきったオゾンと、柔かい芝生の上で庭に備えられた大テーブルにうず高く積まれた、バナナ、パイナップル、メロン、スイカ、牛乳鶏の丸焼、パン、サラダ等の味覚を腹一杯食べ、各地の兄弟、姉妹と和やかに語り友情をはぐくむ様子は、まさにモルモン大家族の風情なのです。

【演劇祭】 東北地方部は阿部順夫兄弟演出のもとに「さっば夜話」、北海道地方部は新江一夫兄弟演出の「夕鶴」が披露されましたが、いずれのスタッフもキャストも名演技で、拍手の波と歓声が絶えません。

【ゼミナール】 北海道、東北抜萃の教師のもとに、次の六つのテーマに分級し、福音を研究し意見を述べるのです。

「偽善とは何か」「不一致をどのように解決出来るか」「学問と信仰をどのように関連づけるか」「人間は過去をどのように変えることが出来るか」「福音研究」「職業選択をどのように考えるべきか」どのクラスでも活発な、真剣な討論がなされました。末日聖徒の若人として何をなすべきかを再確認し合い、励まし証詞を強めました。

【ハイキング】 好きな友達と好きなコースで、共通な想いと、共通の弁当を持ち、札幌の大自然に親しむ私達。避暑地北海道の景観は、旅情と、ロマンのムードトーンのシンフォニーをかなでられるのです。

【ダンスパーティ】 ハイキングから部屋に戻ると、あのリュックのどこにあったのだろう。立派なブレザー、男性化粧品の臭いの中に次々と誕生する紳士、綺麗な洋服で身仕度する淑女諸君。

理美容センターの大講堂に響く小樽支部のサウンドに乗って、赤、緑、黄のライトの走る中を若人は踊る。今宵こそ、若人の祭典なのだ。

【証詞会】 真実に満ちた証詞の数々は、参加者一人一人に勇気づけ励ます靈感あふれるものばかり、誰もがそれぞれの支部、伝道所に戻って頑張るぞ、という誓いを新たにするのでした。

主の山に登るべき者は誰か。
その聖所に立つべき者は誰か。
手が清く心のいさぎよい者。
その魂がむなしい事に望みをかけない者。
偽って誓わない者こそ、その人である。

(詩篇24篇3～4節)

兄弟、姉妹諸君！

来年は仙台で、又翌年も翌年もユースコンファレンスで会えるのです。文通で話せるのです。さざなみで紹介できるのです。末日聖徒の若人は永年の友です。

「友よ大地に明日を築こう」

このテーマのもとに北は釧路から南は郡山迄、総勢220余名の若人が、大自然札幌の地に集い、日本東伝道部初めてのユースコンファレンスを開きました。



(バレーボール試合、この日のために3キロもやせました)



(楽しい食事風景、伝道部長の腕は確かなかな?)



(ハイキングディナー)



(小樽支部の応援団、応援の甲斐はありましたか?)

西部伝道部のページ

第一回ユースコンファレンス開かる

希望をふくらませ、準備を終えて、開会式まであと三日と迫った日、南海上に発生した台風19号は北上し、沖縄九州にその進路を向けていた。沖縄地方部の兄弟姉妹はいち早く8月2日に鹿児島行き船に乗り、台風との競争を始めた。しかし中心付近の最大風速50メートルというこの大型台風はやがてその船を奄美大島付近で捕え、北上し九州に上陸した。鹿児島、宮崎、大分の南九州の会員達、中国地方部の会員達も列車がストップし、駅のベンチで一夜を過ごすなければならなかった。参加申し込み300人を得た第一回ユースコンファレンスも開会式に参加できたのは僅か半数、さきゆきが案じられた。

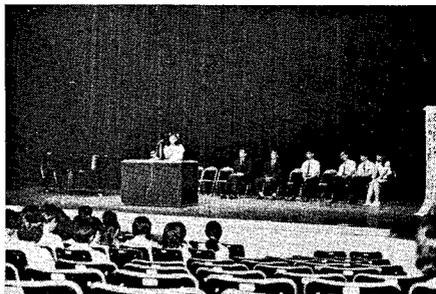
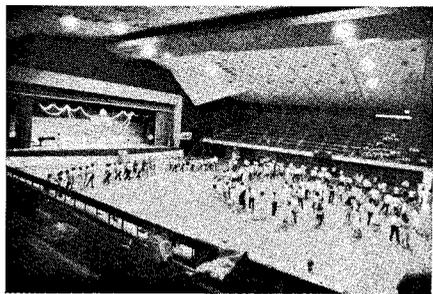
しかし、僅かながらも開会式での力強い行進に、それが杞憂であり、西部伝道部を支える若人の力は逆境をはね返して余りあることを示した。第二日の8月6日には開通になった日豊線、一部開通の鹿児島線を利用して、続々と到着し、ついに同日深夜に沖縄地方部の若人が到着した。彼らは8月2日より、船に乗ること70時間、鹿児島よりバスで13時間、荒波にもまれる船から上陸することもできず、屋根から地面に叩きつけられるほどの船のゆれにもめげず元気な顔を見せて到着した。

「愛と一致」というテーマのもとにまさしく逆境変じて喜びとする所に、愛が生まれ、福音における一致が確立された。そして最終日は全員が揃ってスポーツに、ダンスに若人の力をぶつけ、共に笑い、喜んだのである。

翌日は、安息日朝8時よりの証会に460人という会員がつけめかけ、力強い証が聞かれた。沖縄地方部のある中学生の兄弟の証を紹介しよう。「僕はユースコンファレンスが開かれることを聞いた時、すぐに参加しようと思いましたが、しかし費用は自分で作らなければなりません。そこで毎朝5時に起きて新聞配達をすることにしました。それまでわがままだった僕がお父さんお母さんのいいつけを聞くようになり、弟や妹にも親切にするようになりました。そして毎月もらう給料の中から初めて両親に贈り物をして、親孝行をすることができました。僕は台風のためにたった一日しか参加できませんでしたが、自分で働いて来たことを誇りに思っていますし、とてもうれしい気持ちがあります……」

またある姉妹は、「船に70時間も、それに台風で荒れている海の上で過ごすことはとても考えられないことでした。普通ですと、ほとんどの人が重病人になるところでした。でも不思議でした。私たちは船の中で福音を勉強し、モルモン経を輪読し、讃美歌を歌いました。そして船酔いで衰弱する人は一人もいませんでした。神様は私たちに謙遜するためにこの台風を下さったと感じています……」

喜びと感謝の涙にくれた5時間半に及ぶ証会が終わった時、出席したすべての会員の心には、新たな証と力と勇気を、この狭くて細い道を共に手と手を携えて進もうという決意がみなぎっていた。



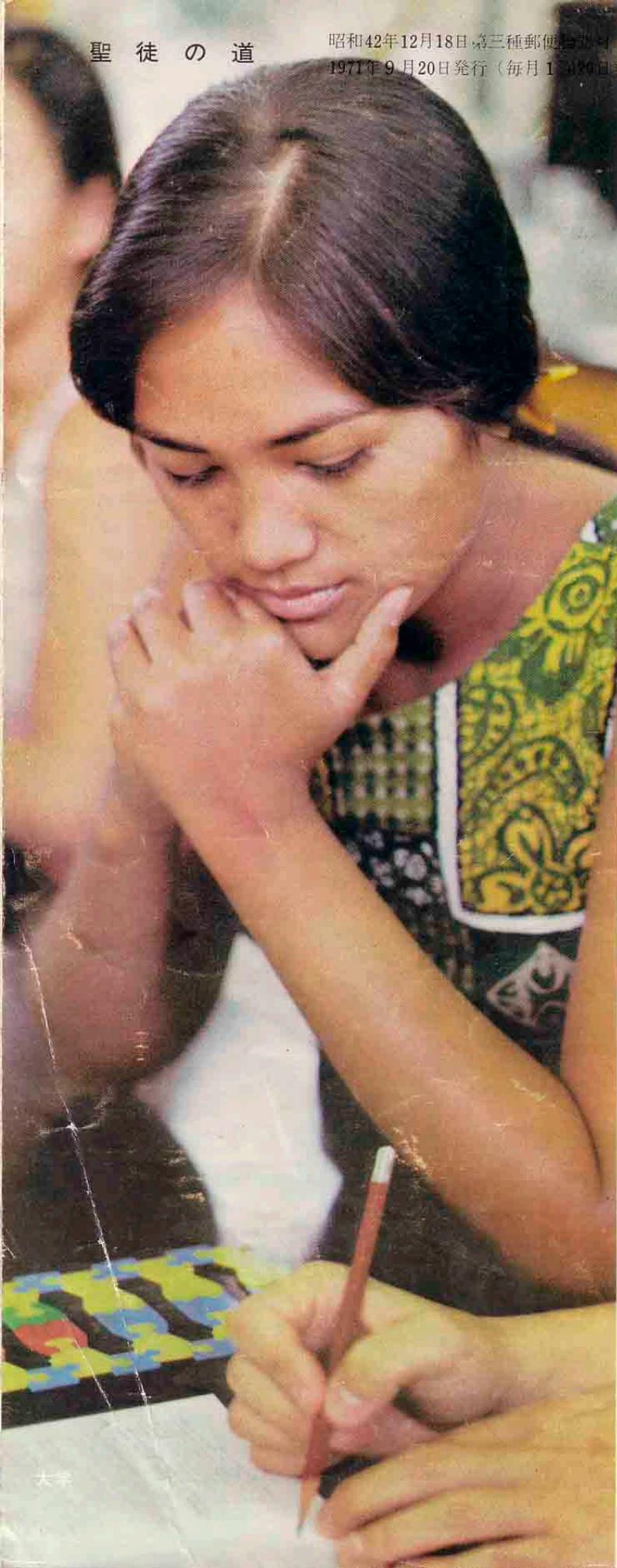
第一回ユースミッションナリープログラム

「すべての教会員は宣教師である」故マッケイ大管長のこの戒めの言葉は西部伝道部に住む若人の心にも大きく響き、

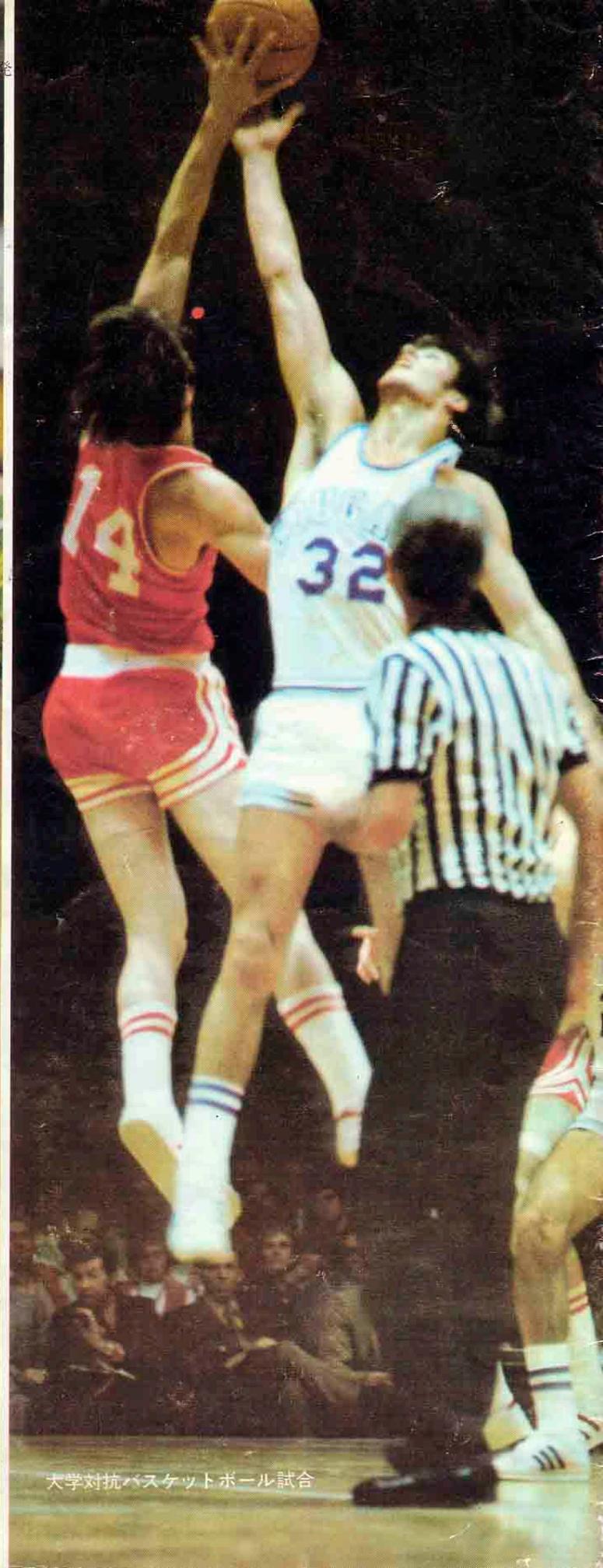
ここに第一回ユースミッションナリープログラムが実施された。ユースコンファレンス、伝道部大会を終えた8月9日、23名の力湧れる兄弟姉妹が朝8時よりオリエンテーションを受けた後、伝道部長会により任命され、希望と決意に胸をふくらませ、各支部、伝道地へと旅立った。

このプログラムは、夏休みを利用しあるいは、職場を休んで、専任宣教師の同僚となり、専任宣教師と全く同じ生活をし、伝道するプログラムである。10日間の宣教師生活を通じ、さらに主の業と真の福音への証を強められた若人は、西部伝道部の歴史に新たなページを加えたのである。





大学



大学対抗バスケットボール試合